

387
35



始



387-35



著 風 詛 毛 稻

田 神 京 東
版 藏 館 同 大

大 正
8. 7 3
内 交

序

「思想」の價値が今日程重大視され、「思想問題」が今日程喋々されたことはあるまい。そして、この現象は、極めて當然のことであると共にまた極めて喜ぶべきことである。思想は本來生活の精髓であり文化の中核であるのに加へて、今日は生活革新の時又は新文化創造の秋だからである。然り、今日は正しく「思想の力」が極度に發揮されるべき時であり、思想家が全力を盡すべき時である。

然るに、我が思想界の現状を見るに、思想に關する論議が喧擾を極め、思想界が活氣を呈してゐるにも係らず、思想其のものゝ意義と價値とが未だ十分に闡明されてゐないと共に、國民思想其のものが低級幼稚なために、謂ふ所の思想問題が徹底的解決を見ることが出来ず、随つて國民思想の本質的進歩が甚だしく遅いのである。そして、思想が生活の精髓であり文化の中核である限り、斯くの如き思想界の現状は、我が國にとつて洵に遺憾なことであり、随つて一日も速かに超越すべきものである。然らば、

如何にすれば斯くの如き現状を超越することが出来るであらうか。勿論其れは、畢竟するに國民全體の自覺と奮起とに俟つ外には途がないのであるが、何よりも先に必要なことは、思想家の努力である。そしてここに、著者が本書「思想の力」一卷を敢て公にしようとする一つの動因がある。

本書は、著者が最近四年間に公にした評論の中から特に「思想」又は「思想問題」に關するもののみを集めたものである。本書が客觀的に見て何等か幾分存在の價値を要請すべき點がありとすれば、それは、謂ふところの「思想」及び「思想問題」の意義を曲りなりにも或る點まで闡明し、著者一流の思想觀と理想主義的見地とから思想問題に對したることと、著者の興味が文明・國民思想・教育・道德・文藝・哲學等の各方面に亘つてゐることとである。(尙この他、政治的方面の思想問題殊に現代に於て最も大きな思想問題ともいふべき民本主義に關する評論はかなり多いが、これは曩に「民本主義の眞髓」を公にしたから大抵割愛することにしたし、又教育上の思想問題に關するものは、同様既に論集「人生と教育」中にをさめて公にしたと共に、同論集發行後のも

のは將來別に一卷として江湖の叱正を乞ふつもりなので、これまた本書から割愛することとした。)これらの點に於て、本書が幾分でも我が國民思想の本質的發達の上に貢獻することが出来るならば、著者の幸福はこれに加ふるものがない。

大正八年霖雨降りしきる六月中浣東京向陽臺の寓居にて

著者識す

目次

✓ (一) 思想の種々相……………一
(二) 理想と人生……………一九
(三) 批評と人生……………四〇
(四) 文明批評の意義……………六四
(五) 戦後の文明と我が國の使命……………八一
● (六) 戦後の思想界を論ず……………一〇六
(七) 新時代の文明……………一二四
✓ (八) 外來思想と國民生活……………一四四
✓ (九) 國民思想の統一と振作……………一七三
✓ (一〇) 國民思想の統一と文部省……………一九六
✓ (一一) 國民思想の統一と教育者……………二〇五

(一三) 教育上の民本主義を論ず……………二二四

6 (一三) 國民道德の改造……………二五一

(一四) 『親道』論……………二八三

(一五) 實業道德の振興……………二九七

(一六) 公人の自殺を論ず……………三一

(一七) ルドルフ・オイケンの思想の眞髓……………三二八

(一八) オイケンの個人主義論……………三四三

(一九) 理想と文藝……………三七七

(二〇) 人間性の解放……………三九八

(二一) 文藝上のヒューマニズム……………四四一

(二二) 文藝上の理想主義……………四七九

(二三) 新理想主義とは何ぞや……………五二八

(二四) 文藝の倫理性……………五五〇

(二五) 倫理學と文學の關係……………五七三

(二六) 主義と個性……………六一六

思想の力

稻毛詛風著



思想の種々相

世には、一見明瞭なやうで實は甚だしく曖昧模糊たるものが少くない。「思想」の如きも其の一つである。

「思想」といふ語は各種の方面に於て用ゐられる。殊に最近の我が國に於てさうである。たとへば、「思想の獨立」とか、「國民思想の統一」とか、「思想問題の研究」とか、「戦後の思想界」とか、乃至は「危険思想」とかいふが如きは、最近頻々として吾々の聞睹するところではないか。然るに、これらの語の意義は、何れも自明であるかのやう

に思はれながら、實は何れもさうではないのである。廣義に思想乃至思想問題なるものが、一部識者ばかりでなく、廣く國民一般から甚だしく重大視されるやうになつた今日に於て、徒らに思想に關する叫聲のみ喧しくて、容易く思想界の本質的進歩を見ることが出来ないのは所以あることではないか。

併しながら、苟くも思想界の一隅に坐し、自覺的に思想生活を生活してゐるばかりでなく、更に個人的にも國家的にも思想の獨立又は生活の思想化の極めて大切であることを理會し力説しつゝあるものは、到底斯くの如き我が國の現状を對岸の火災視することが出来ない。これ、私が本論を草して識者の示教を要める所以である。

二

私から見れば、「思想」には少くとも四つの意義がある。第一は、實行に對するものであり、第二は、情意作用に對するものであり、第三及び第四は、學的知識に對するものである、そして、嚴密な意味に於ける思想は第四のもののみである。

第一に、實行に對するものとしての思想は、一口に「思ふ」ことである。そして、謂

ふ所の「思ふ」こととは、單に嚴密な意味に於て「思惟」することはかりでなく、更に「欲する」ことをも「感ずる」ことをも含んだもので、要するに一切の精神作用を指すのである。倒まにいへば、生理的肉體的動作以外の生活の凡てを指すのである。但し、この最廣義の場合に於ても、思想は思惟即ち認知作用を中心とすることはいふまでもなす。

第二に、情意作用に對するものとしての思想は、上記の精神作用中の一方面、即ち特に認知作用を指したものであるから、第一の意味のものより狭く、随つて、其の性質が一層明白であることはいふまでもない。そして、この意味の思想は、普通「思考」又は「思惟」の名を以て呼ばれてゐる。但し、嚴密にいへば、この意味の思想にも亦二つの區別がある。即ち、一つは、これを「作用」と見るものであり。一つは、これを「内容」と見るものである。更に詳しくいへば、前者は、思考作用乃至思惟作用(Thinking, Denken)即ち判断を動力とする概念作用や推理作用を思想と見るものであり、後者は、思考内容乃至思惟内容即ち思想されたもの(Thought, Gedanke)、又は廣義の「知

「識」を思想と見るものである。そして、普通は主として後者を「思想」と呼ぶのである。然るに、この意味の知識にも亦低いものと高いもの、若しくは、廣いものと狭いものとの別がある。そして、前者は普通「知識」の名稱を以て呼ばれ後者のみ「思想」と呼ばれる。而かも又、この意味の知識と對立するものとしての思想も、其の態度が没批判的であるか又は批判的であるかに従つて、低いものと高いものとに二分することが出来る。即ち、前者は嚴密な意味の知識——學的知識以下のものであり、後者は學的知識以上のものである。斯くして思想には、更に、前に擧げた第三と第四の二つの種類を生ずることとなるのである。そして、第三の意味の思想も第四の意味の思想も、等しく廣義の知識に對するものである點に於て、即ち、知識は客觀的抽象的であるのに對して、思想は主觀的（情意的）具象的である點に於て、其の揆を一にするものである。

これを詳言するに、第三に、學的知識に對するものとしての思想の中、低いもの、即ち没批判的なものは、常識・感想・意見などと呼ばれるもので、思惟内容中特に主觀的なもの、即ち情意化され、具象化され、生命化され、生活化され、隨つて、自我人格の精髓に對しては、知識に比して一層近く、自ら又高い意味に於て知識に比して一層實用的なものである。

第四に、學問乃至學的知識に對するものとしての思想の中、高いもの、即ち批判的なものは、最も狭い意味の思想で、その特色は、大體に於て第三のものと同一であることは、既に一言したところである。只兩者の異なるところは、前者の材料となる「知識」は、未だ嚴密な意味の知識、即ち、合理的・系統的・方法的知識——十分に論理的客觀的價值ある知識ではなくて、單に低級な俗智俗見——没批判的思想に過ぎないのに對して、後者の材料となる知識は十分に論理的客觀的價值のある學的知識であり、隨つて批判的思想であるといふ點である。更に別言すれば、第三の意味の思想は、客觀的價值は勿論、主觀的價值すら十分に具はつてゐないのに對して、第四の意味の思想は、主觀的價值は勿論、客觀的價值も亦十分に具はつてゐるものであり、理論的に見て有効なものであると共に、實際的に見ても亦有効なものである。隨つて、最も價

値ある思想は第四の意味の思想である。

三

以上私は、極めて簡単でありそして極めて形式的抽象的ではあるが、兎に角一般に「思想」といふ名辭の包括する種々の意義を検覈し分類することによつて、其の嚴密な意味を限定することが出来た。

私から見れば、嚴密な意味に於て「思想」といふに値するものは、要するに客觀的價値ある知識を具象化——生命化したものである。更に詳しくいへば、知識として十分に價値あるものを單に知識として置かないで、これを確實に自己のもの——自我乃至生活の根本要素としたものが、やがて嚴密な意味の思想である。随つて、この意味の思想は、思想の所有者にとつては外的なものではなくて全然内的なものである。即ち、思想の所有者の最深要求と其の本性と矛盾するものではなくて、それと十分に調和統一を保ち、十分な有機的關係を有するものである。この意味に於て、思想は、自我の全體に行き亘ると共に其の根柢に徹するものであり、随つて根柢的全體的知

識であるといふことが出来る。然らば、如何にすれば、知識を斯くの如き意味の思想とすることが出来るであらうか。一言にすれば、知識を自覺的乃至批判的に取扱つた結果として生ずるものが思想なのである。この意味に於て、無知なものには思想があり得ないと共に、知識あるものが必ずしも思想あるものといふことは出来ない。事實に於て、學者などで低級な思想しか持たないものが決して少くないではないか。

既に述べたやうに、知識は自我に對して外的なものである。即ち、知識は文字通に「所有」すべきものである。併しながら、これを自我の最深要求に照し、自我の第一義生活と結合することに依つて十分に活用する時には、其の一部分は自我の構成要素となつて自我と離るべからざる本質的關係——有機的關係を結ぶこととなるものである。これが、とりもなほさず謂ふ所の思想其のものである。随つて、思想は嚴密な意味で自我の一部分、否一大主要部分である。これ、思想の變化はやがて自我そのもの乃至人格そのもの、變化であるといはれる所以に他ならない。

思想が自我の主要素であるといふことは、一方に於ては自我の統率力であるといふ

ことである。蓋し、思想の素材は知識であり、随つて思想の特色が知的な所にあるのは、本来理知は情意に明白な目的と手段とを提供するものだからである。この意味に於て、「思想は力」であることは勿論、知識も亦力である。只思想は、情意化され全體化根柢化された知識である點に於て、知識に比して一層強烈な一層有効な力である。然り、思想こそは眞の力であり思想こそは自我其のものである。思想の破壊が全自我全生活の死滅となることがあるのは所以あることではないか。そして、思想が自我に對して力であるといふことは、自我の「統一力」であると共に、自我の「指導力」であるといふことを意味する。これ私が、思想を「自我の統率力」であるといつた所以に他ならない。

思想が自我の統率力であるかぎり、思想は勿論統一、自由、獨立を以て其れの本性とすするものでなくてはならない。自ら統一せず、自ら自由でなく、自ら獨立してゐなければ、他を統率することは出来ないからである。この意味に於て、統一のない思想は、偽の思想であるか若しくは未だ不完全な思想であり、「思想の獨立」とか、「自由

思想家」とかいふことは蛇足的な名辭であり、更に、「借想」とか「思想の模倣」とかいふことは、嚴密な意味に於ては不可能であることは改めていふまでもない。されば個人の思想を批判するには、第一に、其れが果してどれ程まで其の人のものになつてゐるか——情意化され自我化されてゐるかといふことを嚴密に吟味しなくてはならない。

これを要するに、思想は、外から與へられるものではなくて内から生れて來るものである。勿論其れの素材は外から與へられるものであり、随つて、其れを發達させるには絶えず外から素材を取り入れることを要するものであるが、思想の根本動力は自我乃至人格のうち本具するものである。思想が、自我乃至人格の主要素となり統率力となり得るのも、蓋しこれがために他ならない。随つて、この思想の根本動力が優秀なものでない限り、またはこれが有効に作用しない限り、如何程優秀な素材を如何程豊富に所有するとも、それだけでは決して優秀な思想は生じない。然らば、いふ所の思想の根本動力とは何を意味するであらうか。いふまでもなく、よりよく生きよう

とする意志、即ち生の第一義欲である。されば、眞に優秀な思想を所有し、眞に價値ある思想生活を營まうとするものは、何よりもこの第一義欲を目覚めさせ、且斷えずこれを緊張させることによつて、素材たる知識を生命化して行くやうにしなければならぬ。そして、この點から見る時は、嚴密な意味に於ける思想を所有したといふことは、やがて自己に目覚めたといふことであり、獨自の人格が成立したといふことであるといはなくてはならない。これ、私が、我が國現代の國民生活に思想的根柢のないことを痛歎する所以である。

然り、嚴密な意味に於ける「自覺」の有無高下こそは、やがて思想の有無高下であると共に、自我乃至生活の價値の追分である。随つて、眞に自覺あるものにとつては思想はやがて力であるから、少くとも主觀的には文字通の危險思想といふものはあり得ない。思想が危險なものとなるのは、本當の自覺を持たないものに對してのみである。この意味に於て、私は、所謂危險思想を抑壓する最良方法は、國民の正しい自覺を喚起することであると思ふものである。

四

翻つて、以上の如き意味に於ける思想を、其れの對象の方面から見る時には、更に種々の分類を施すことが出来る。先づ、これを其の「量」から見る時には、二つとなる。一つは個的のものであり、一つは團體的のものである。個的思想とは、勿論個人思想であるが、團體的思想には更に二つの別がある。一つは空間的見地から見たもので、國民思想とか東洋思想とかいふものがそれであり、一つは時間的見地から見たもので、時代思想とか近代思想とかいふものがそれである。そして、上に述べたやうな思想の見方に従へば、個的思想こそは、最も十分な意味に於ける思想である。

次に、これを對象の性質から見る時には、思想は、部分的のものと全體的のものと二つに別つことが出来る。部分的のものは、自我・人生・乃至自然の一部分を對象とするものであり。全體的のものは、^{アズ、エ、ホール}全一體としての自我や人生や自然を對象とするものである。科學思想・藝術思想・道德思想・政治思想・經濟思想といふやうなものは前者に屬し、哲學思想及び高い意味の宗教思想・藝術思想は後者に屬する。そし

て、上に述べたやうな思想の見方に従へば、哲學思想こそは、最も十分な意味に於ける思想である。

五

「思想」に關する私の見解は、やがて、「思想家」に關する私の見解である。私は、上に述べたやうな見地から思想に對すると共に、また思想家に對するものである。即ち、私から見れば、大まかに思想家といふ時には、少くとも其の中に四つの種類を包括してゐる。第一は、實務家に對するものとしての思想家であり、第二は、學者に對するものとしての思想家であり、第三は、批評家及び作家に對するものとしての思想家であり、第四は、職業的思想家に對するものとしての思想家である。そして、第四のものこそ、本當の意味に於ける思想家である。但し、この分類は、前に試みた思想の分類程論理的・整合的コングリエンツでないことは、對象の性質上止むを得ないことである。

第一に、實務家に對するものとしての思想家とは、廣い意味の「思想」に依つて生活するもので、學者(科學者と哲學者)や藝術家や宗教家のすべてを包括するものである。廣い意味で「思想界」といふ言葉は、やがてこの意味の思想家の生活範圍を指すものである。併しながら、この種の思想家を以て嚴密な意味の思想家と見做すことが出来ないことは、思想の意義から見て自明なことである。

第二に、學者に對するものとしての思想家とは、上に述べた第四の意味の思想、即ち嚴密な意味の思想に依つて生活するもので、藝術家や思想評論家を指すものである。そして、この意味に於ける學者と思想家との相違は、やがて學問と思想との相違である。即ち、學者は客觀的價值ある知識を純客觀的に取扱ふのに對して、思想家はこれを主觀化し、前者は自己を殺し——間接に自己を現はすのに對して、後者は自己を直接に現はし、一は人を教へ、人に知識を傳へるのに對して、他は人を動かし、人を本質的に成長させるのである。

併しながら、この意味の思想家にも亦、思想の取扱方及び思想に對する態度心事によつて三つの相違が生ずるのである。即ち、先づ、思想の取扱方の相違に従つて、批評家と作家と思想家とに別つことが出来るし、次に、思想に對する態度心事の相違に

従つて、職業的思想家と眞の批評家とに別つことが出来る。斯くして、思想家に、前に挙げた第三第四の區別が生ずることとなるのである。

第三に、批評家及び作家に對するものとしての思想家とは、最も高い意味の思想を取扱ひ乍ら、思想を思想として、直接に、積極的に、純粹に表現するものである。詳言するに、批評家は、必ず何等か他人の思想を材料とし、それを通して自己の思想を間接に消極的に表現するものであり、作家は、思想を思想としてとなく、寧ろ他の種々のものと混じり、且美的形象中の一要素として、或は其れの基礎乃至背景として、批評家と異つた意味で間接に表現するものであるのに對して、思想家は思想を純乎たる思想として、必ずしも他の媒介を俟つことなしに、直接に、端的に、積極的に表白するものである。但し、思想家は、この使命を果すためには、其の論理を透徹さすべき點に於て學者及び批評家と其の揆を一にし、思想を如實に生ける儘に表現すべき點に於て作家と其の揆を一にするものである。この意味に於て、眞の思想家は學者と作家との中間に位し、最も批評家に近いものといはなくてはならない。事實に於て、思想家

と批評家とは、容易く嚴密な區別を施すことは出来ないものである。換言すれば批評家でない思想家はなく、また思想家でない批評家はないのである。要するに、兩者の差異は、自己の思想乃至思想の取扱方の差異に他ならないのである。

第四に、職業的思想家に對するものとしての思想家とは、前者が思想に依つて生きるのと異つて、思想に生きるものである。自己独自の思想を所有し、且其れの擁護と發達と體現とを生ずる第一義とするものであり、眞に自覺的に生きるものである。そして、独自の思想を所有するが故に、思想家は、内には、確乎たる信念と、永しへに拘束されることのない自由と、永しへに脅かされることのない獨立とを有すると共に、鮮明な主義と一貫した態度とを以て外に對するものである。独自の思想の擁護と發達と體現とを生ずる第一義とするが故に、眞の思想家は、常に理想を懷抱し、絶えず向上精進の途を辿り、思想と實行、内生活と外生活との調和統一を念とするばかりでなく、自己の思想と他の思想との調和統一に努め、且自己の思想を眞に非と悟らざる限りは、生命を賭して自己の思想——正しき思想のために他の思想——正しからざる思想と

戦ふものである。これ、眞の思想家が、理想と確信とを生命とする哲學者又は宗教家の中に最も多く見出すことの出来る所以であると共に、眞の思想家の多くが、世の迫害を受けて悲痛な生活を送るに至る所以である。

但し、この意味の思想家は、勿論單に哲學者や宗教家の中にのみあるのではなくて、如何なる職業に従事するもの、間にも存在するのである。事實に於てこの意味の「思想家」は、職業上の名稱ではなくて、必ず何等か他の職業に従事するもの、中の或るものに與へられる特殊の名稱である。即ち、この意味の思想家と對照した職業的思想家といふもの、中に存するのである。要は、思想に依つて生活するのではなくて本當の意味の思想に生きるものである。蓋し本當の意味の思想は、生活の單なる手段ではなくて、生活其のもの——生活の根本要素だからである。

六

翻つて、我が國の現状を見るに、私は思想の意義を闡明し、其の價値を力説することの必要を最も痛切に感ずるものである。蓋し、今日の我が國は、一面に於ては既に

述べたやうに、「思想」といふものがかなりに重大視されてゐるにも係らず、いふ所の思想の意義が闡明されないために、適切な方法を發見することが出来なくて、徒に五里霧中に彷徨してゐるのに對して、他面に於ては、思想の價値に對する何等の自覺もなしに、極めて低級淺薄な生活を營んでゐるものが甚だしく多しと共に、嚴密な意味に於ける我が國民の思想乃至國民思想が、著しく混亂萎微の状態にあり、著しく幼稚の程度にあるからである。一言にすれば、今日の我が國は、思想的革新の時に而接してゐるにも係らず、思想の意味と價値とが國民から徹底的に理解されてゐないために、容易く其の効果を擧げることが出来ないからである。この意味に於て、私は、廣義の思想界及び思想家が益々勢力を占めると共に、思想家を以て任ずるものが、自己の使命と天職とを自覺し、且其の使命と天職との貫徹のために有効な努力を試みられんことを要望して止まないものである。

尙、この點から見て遺憾に思ふことは、現在の我が國には本當の意味の思想家が皆無といつてもよいといふことである。勿論、今日の我が國には、所謂思想家は少から

ずある。併しながら、彼等の多くは私の意味する思想家——本當の思想家ではなくて、單に思想に依つて生きる職業的思想家である。眞に獨自なそして優秀な思想を所有し且其の擁護と發達と體現とのために、斷えず最善の努力を試みることによつて、自己の生活を意義あるものとすると共に、更に進んで國民の標的となり、國民思想の統一と振作と發達との原動力となることの出来るやうな、まことの思想家ではなくて、確信も主義も理想も誠意も實力もない似而非思想家である。あゝこの國民思想の危機に際して、「思想は力なり」といふ言葉を眞に體現する大思想家は、果して何時、また何處から生れて來るであらうか。

理想と人生

「我思ふ、故に我あり」といふデカルトの言葉は、永遠の眞理ではあるが、而かも其れは、只他の一面に於て、人間の本質を意欲であると見たショーペンハウエルの見解と提携してのみ、全き眞理であることを忘れてはならない。蓋し、人間は、「思ふ」ものであると共に「欲する」ものだからである。聰明な近代の哲學者が、哲學を「認識の哲學」と「價値の哲學」とに別つのは、この意味に於てまことに當然のことである。

併しながら、更に一層徹底的に考へる時には、恐らく何人もこの二元的の見方に満足することは出来ないであらう。蓋し、人格の根本屬性は「統一」といふことにあるからである。斯くして「思ふ」ことと「欲する」こととを横に並列することの不徹底を打破し、これを一つにしようとする結果として、所謂主知主義と主意主義との對峙

を生ずるに至るのである。「知る」ことは、「思ふ」ことは、いふまでもなくたしかに生活の一大要素である。人間が其の他の存在と趣を異にする所は、畢竟するに、この「知る」能力、「思ふ」能力を具へて居るといふことに存する。古人が、「理性的存在」といふことを以て人間が萬物の長たる所以であるとしたのは、この意味に於て妥當な見解である。

然るに、凡そ何ごとでも皆何等か其れ自身の目的を持たぬものはない。随つて、或る対象を以て全然他の手段方便と見るのは、未だ其の見方が囚はれて居るからである。小さな主観の發動を抑制して、對者と同感する時には、必ず對者が其れ自身の目的を以て存在して居ることを理解することが出来るのである。「知る」こと、「思ふ」ことにも亦各其れ自身の目的がある。事實に於て、吾々は或ることを知り、或ることを思ふこと其のことに一種の満足を感じる。冥想思索認識理解其のものに一種の價值を感じる。併しながら、満足を覺え價值を感じるが故に、冥想思索認識理解其のものを以て、純粹に理知の獨立作用と思ふものがあるならば、其れは大なる謬見である。

本來満足の感は意志遂行目的達成に伴ふものである。随つて、認識若しくは思惟によつて満足を感ずるには、必ず認識作用若しくは思惟作用其のもの、中に意的要素目的的要素が介在して居なくてはならない。即ち、いふ所の「知らんとする意志」の發動がなくてはならない。然るにこの意志の満足は、必ずしも全自我の満足とならないことがある。只對象の真相を認識し理解しただけでは全自我の満足とならないばかりか、寧ろ却つて認識し理解しないよりも一層多くの不満足を感ずることがある。勿論對象の性質の如何を問はず、或る對象を正確に認識し理解することは、これを不明曖昧なまゝにして置くことに比しては、たしかに自我により多くの満足を與へる。只、認識し理解した内容の如何によつては、時として正確に認識し理解したために、自我に致命傷を與へるほどの大打撃を受けることがないとも限らないのである。そして、この點にこそ、いふ所の「知らんとする意志」と「生きんとする意志」、若しくは、「理知的認識」と「情意的認識」との接觸點が存するのである。

認識意志はやがて生活意志である。認識意志の満足を全我的満足とならないことの

あるのは、畢竟するに自我は認識よりも一層廣汎なものだからである。自我の精髓は認識意志ではないからである。認識意志は一面的なものであり派生的なものだからである。然らば、自我の精髓は何であるか、認識意志よりも一層本源的な意志とは何であるか。いふまでもなく、それは最も高い意味に於ける「生活意志」以外の何ものでもない。

併しながら、生活意志が自我の精髓であり、認識意志が派生的のものであるといふことは、生活意志が盲目的なものだといふ意味ではない。蓋し、認識意志が生活意志から派生することが、既に生活意志の中には認識能力を可能性として包含して居るといふことだからである。随つて、認識能力の価値を度外視しては、生活意志即ち自我の本質的価値を批評することが出来ないと共に、認識能力の發達を度外視しては、生活意志即ち自我の發達を批判することは出来ない。斯くして、生きんとする意志は單に没批判的に生きんことを欲するだけではなくて、人間は、何故に生きなくてはならないか、如何なるが意義ある生活か、如何にすれば最もよい生き方をする事が出来るかといふやうな價値的要素を加味して來るのである。そして、斯くの如き境地になれば、認識と意欲とは最早分裂を許さない。即ち、知ることとはやがて行ふこととなる。生活の價値を高めることを外にして認識の價値はないこととなる。換言すれば、認識其のものが生活の一大要素となるのである。

二

意義ある生活を生きたるといふことは、やがて自覺的に生きたるといふことである。そして自覺的に生きたるとは、いふまでもなく、生活の意味と價値とを理會しながら生きたることであると共に、絶えずよりよく生きたることである。然るに、世には、「自覺」といへば、單に前の意味のみに限るものが少くない。併しながら、認識意志は生活意志を根源とするものであり、知ることはやがて行ふことであることを理會するものから見れば、生活の意味と價値とを理會することは、やがて絶えず生活を改造して行くことであると見ることには何等の矛盾をも感じない。蓋し、價値は目的理想を豫想し、價値の理會はやがて目的理想の樹立を豫想するものだからである。更に一層平明に説明

すれば、自己が何であるか、自己の生活が如何なる價があるかを理會するには、只自己が何であるべきか、自己の生活を如何程價値あるものとすべきかといふことを理會してのみ出来ることであると共に、また斯くしてのみ意味あることだからである。随つて、理想を否定する限り、人生には價値の存在する餘地がなく、勿論また價値を理會する可能も必要もない。生活改造の意志即ち理想的精神の發動のない所に、自己若しくは自己の生活の真相眞價を理會しようといふ自己反省自己認識即ち通例の意味に於ける自覺作用の起る所以もなければまた起る必要もない。無理想無解決を標榜した自然主義の文藝家が、其れの文藝觀を人生觀に轉化した時に、懷疑主義虚無主義悲觀主義となつたのは、蓋しこれが爲に他ならない。自然科学的見地に於ては兎に角、苟くも價値的に人生に對する限り、理想なき所には人生はない。人生の理會もなければ人生の進歩もない。然り、人生の價値を理會するといふことは、やがて人生の價値を高めるといふことである。自覺的に生きて行くといふことは、絶えずよりよく生きて行くといふことである。凡そ嚴密な意味で、生活上の「主義」と呼ばれるものは、何

等かの意味で理想主義でなくてはならないと私が主張するのも蓋しこれがためである。

理想を離れて自覺ありとするものは、即ち、自覺を以て單なる反省であり、單なる認識でありとするものは、人生を靜的に見るものである。理知を本位として自己と人生とに對するものである。これに反して、情意を本位として自己と人生とに對し、人生を動的に見る限り、自覺は單なる反省でも單なる認識でもなくて、寧ろ要求を根柢とする反省であり、實行を目的とする認識である。表面的には分析若しくは分裂の如くにして、實は綜合であり統一である。より複雑な綜合、より緊密な統一のための分析であり分裂である。そして、自覺の度が高くなればなる程自我乃至生活の綜合が益益複雑となり愈々緊密となるのは、畢竟するに、自覺は單なる理知や認識上のことではなくて理想を本源とする全我的の作用だからである。更に、目的的存在たる人格の根本屬性が「自覺」であるといふのも、要するに、いふ所の自覺が、管に上に述べたやうな意味に於て認識力と理想力とを併せ兼ねて居るがためばかりでなく、更に理想力

が寧ろ其の根本性質だからに他ならない。然り、理想力は自覺の精髓である。自覺の精髓であることはやがて人間の精髓であることを意味し、人生の精髓であることを意味する。理想のない所に人生——創造乃至改造を生命とする價值的進歩的生活がないといふのは蓋しこれがためである。

三

理想は、個人に對しても全人生に對しても光であり力である。理想のある所に、人生は前途を有し、且その前途をかがやかしい、よりよきものとする動力を有する。理想的精神を以て人生に對する時、人生は潑刺たる生命ある者と見え、絶えざる創造過程改造過程と見える。但し、理想あるものに對して人生が光明的なものに見えるのは、人生其のものに光明があるからではなくて、理想を持つ自己其のもの、自我に、生活に光明があるからである。蓋し、人生の光や力は外から與へられるものではなくて、只自己其のものを信ずることより生れて來るものだからである。そして、自己を信ずるとは、自己の理想其のものを信ずることであると共に、自己の理想を實現する

能力を信ずることである。随つて、人生の光や力は、眞の光や力は、件の理想を實現するための能力を觸發することによつて、能力に對する信念が明白に事實化された場合に於て、はじめて現はれるものである。この意味に於て、人生に光と力とを與へるものは理想であるといふことは、やがて、この理想を實現する努力其のものが人生に光と力とを與へるものであるといふことを意味するのである。

翻つて思ふに、凡そ「力」は分裂によつては生れない。力の母は統一である。但し、いふ所の統一は、勿論多中の一である、靜的統一若しくは劃一ではなくて、動的統一である。統一原理が構成要素以外にあるのではなくて、構成要素其のもの、中に内在することである。「理想は力である」といふことはこの意味に於ける統一力であるといふことである。自我其のものの生活其のものを統一的にはたらかして行く力であるといふことである。そして、いふ所の統一力は、自我に内在すべきものであるが故に、理想の自我に對する關係は勿論他律的でなくて自律的である。自我のうちよりの力で、自我の本質若しくは現實性に即して自我を動かして行くものである。この意味に於て、

理想に従つて生活することは、やがて自律的に生活することであり、自由に生活することである。

但し自由は存在するものではなくて、外から與へられるものではなくて、獲得すべきものであり内から造り出すべきものである。何となれば、自由は、理想的精神を根源とするものだからである。理想に従つて、自我を、生活をよりよくして行く過程を外にして、眞の自由はあり得ないからである。理想を標的として絶えず迫害に打ち克ち、絶えず惰性を打ち破り、絶えず新天地を打ち開いて行くこと其のことを外にして自由はあり得ないからである。頑迷な科學者が人生や實在の本質を機械的のものとするのも、即ち、人生に自由性創造性改造性の存在を否定するのも、畢竟するに、彼等が未だこの意味に於ける理想の價値を認めることが出来ないからである。

併しながら、凡そ本當に科學の本質について眞面目に思を致したことが只の一度でもあるものならば、科學を以て全然物質的であるといふものは一人もあるまい。然り、科學——自然科學すらも——は其の根柢に於て精神的のものである。蓋し、科學の動

力たる理知概念は物質ではないからである。只、科學は偏に理知的概念的に對象を見るために、即ち、表面的には情意の要求若しくは理想的精神の發動を抑制して對象を見るために、其處に自由や目的や理想の存在を肯定する餘地がなくなるのである。併しながら、科學其のものはいふまでもなく進歩を生命とするものである。然らば、對象を機械的靜的理知的に見る科學は、如何にして自ら進歩することが出来るであらうか。要するに、科學者の理知の進歩を動力とすることを他にして科學は自ら進歩することは出来ない。然らば、科學者の理知は如何にして進歩するであらうか。いふまでもなく、それは理想の力——情意の要求若しくは理性の創造作用に俟つ外はない。理知が未だ正確に認識し論證することの出来ない或る要求理想假定乃至想像を、所謂「憶説」として情意が掲げることによつてのみ科學は進歩するのである。この意味に於て、科學に於ける憶説の價値は、やがて科學に於ける「理想」の價値でなくてはならない。然り、一見すれば、反理想的のものと思はれる科學すらも、それが人間生活分内のものである限り、單なる事實として説明するだけに止ることが出来ない。即ち、理

想的精神と没交渉であることが出来ない。事實に於て、科學は自然界を理想化したものである、即ち、自然界を統一的に目的的に取扱ふものである。斯くの如く、科學すらも理想を原動力とするものであるから、其の他は推して知るべきである。然り、凡そ一切の進歩の動力となるものはこの理想である。この意味に於て理想は創造力であり改造力であり、随つてまた人生の原動力である。

繰り返していふ。理想は創造力であり改造力であり、更に人生の原動力である。實に、人間が理想を持つことは、やがて人間をして所謂自然から區別せしめる所以であると共に、人間が最高の意味に於ける自然——大自然大宇宙の本質精髓たる「創造力」乃至「生命力」を最も十分に享受して居ることの證據である。そして理想は斯くの如く、實在の本源たる創造力乃至生命力のあらはれであるが故に、其れ自身普遍的妥當性を有するものである。されば、理想に従つて生活するといふことは、勿論自恣放縱になつていふことではなくて自己を一層高大なものを以て律するといふことである。自己を一層高大なものと化して行くといふことである。自己を何等かの意味で普遍化した

永遠化して行くといふことである。斯くして、理想に従つて生活するものは狭少な獨我主義乃至主我主義と現實主義乃至利那主義とを脱して、社會と歴史との中に生活するに至るのである。

改めていふまでもなく、全體としての人間の特色は、これを外面的に見れば社會を組織する所にあるし、これを内面的に見れば歴史を有する所にある。そして社會といひ歴史といふも、竟畢するに、理想力の致す所である。蓋し、社會は理想力の一屬性たる普遍性を具體化したものであり、歴史は理想力の一屬性たる永遠性を具體化したものだからである。事實に於て、理想に従つて生きるものは、人間理想の進化の跡を歴史によつて知るばかりでなく、更に自己の將に行くべき道を、臚ろげながらも歴史によつて理會すると共に、理想樹立の基礎と理想實現の場所とを社會の中に見出すものである。この點から見ると、歴史を以て單なる記録としたり、社會を以て單なる打算的契約の結果としたりすることは明らかに大なる誤謬である。然り、全體としての人間の本質は、理想を原動力とする人間の本質は、只縦には歴史により横には社

會によつてのみ知ることが出来るのである。この意味に於て、歴史を造るものが偉大なる人間であると共に社會を支配するものも亦偉大なる人間である。歴史と社會とに没交渉な理想といふことは語其自身矛盾して居ることは改めていふまでもあるまい。

四

凡そ人生を價值と見る限り理想を否定することは出来ないと同様に、凡そ自覺的に目的的に生活する限り理想を否定することは出来ない。理想を否定せんとするには自己を否定しなくてはならない、更に否定する自己そのものを否定しなくてはならない。然り、否定が自覺的目的的に營まれる限り、理想は永遠に否定することが出来ない。私が、凡そそれが自覺的に營まれるものである限り、自殺の刹那に於てすらも尙且理想の力を全く否定することが出来ないといふのは蓋しこれがためである。換言すれば、人生があるために理想があるのでなく、理想があるために人生があるのである。そして茲に理想主義の樂天觀がある。

然るに、世には、理想を以て單なる空想と同一視することによつて其れの價值を蔑

視するものが少くない。勿論、理想と空想とは或る意味に於て類似して居る。即ち其れらは等しく非現實的であるといふことに於て揆を一にする。併し、等しく非現實的でありながら、理想は客觀的合理的である點に於て、單に主觀的任意的な空想とは截然趣を異にする。理想は非現實的な點に於ては空想と同一であるが、而かもいふ所の非現實性は、實在性乃至客觀的妥當性を有するものである點に於て、精しくは、文字通りに現實的ではないが反現實的ではなくて、必ず現實に即すべきもの、即ち將成的——將にあるべきものである點に於て、更に全人格的即ち人格の全體の根柢的作用であり、随つて人格に對して規制力を有する點に於て、實在性乃至客觀的妥當性を有せず、單に最も低級な意味で主觀的にのみ存在し、且人格の皮相的一面的作用たる空想とは似て酷だしく非なるものである。理想を以て單に抽象的主觀的非現實的のものとするのは、畢竟するに、理想をこの空想と混同することによつて、理想の實在性絶對性乃至普遍的妥當性を没却したものである。

勿論、理想があつてのみ人生があるといふことは、嚴密にいへば、理想は直ちに人

生であるといふことではなくて、寧ろ理想は人生の究極到達點であり、最高統率力であり、中心精髓であるといふことを意味する。理想を以て「ある」ものとし、^{ザイン}「あるべき」ものとし、「與へ」られるものとし、^{ハベイン}「與へらるべき」ものとし、「創造」すべきものとし、「完具」なものとし、^{ゲザイン}「あること」を主として見ることも出来る。

併しながら、全然現實を離れた理想が抽象であると共に、全然理想を離れた現實も亦抽象である。眞に具象的な、眞に生ける理想は、現實に内在して現實を内部から支配し改造して行くものであり、随つて、眞に具象的な眞に生ける人生は、理想を主にして現實を支配し現實に即して理想を樹立する所にある。この意味に於て、人生は全然與へられたもので全然機械的必然的なものでもなく、随つて、自然主義的的人生觀が誤謬であると共に、人生はまた全然創造すべきものでも全然自由なものでもなく、随つて

抽象理想主義的的人生觀が誤謬である。然り、人生は最も高い意味に於ける改造的なものであり、所謂可決定的非決定的なものである。換言すれば、「創造的進化」であり、「戦」である。

理想と現實とは斯くの如き關係を有するものであるが故に、理想の人生に於ける價値は、畢竟するに、與件たる現實に對する理會の度と、現實の價値の利用の度とに依存するものである。換言すれば、理想をして十分價値あらしめんがためには、與へられたる現實、即ち、自己現在の能力と境遇とを正確に理會すると共に、斯くの如き價値を最善に發揮しなくてはならない。蓋し理想と現實との關係は一元的内在的なものであり、随つて、現實を正確に理會することなしには、理會が根柢の鞏固と内容の適切とを失ふと共に、自己現在の能力を最善に發揮し、自己現在の境遇を最善に利用することなしには、理想を十分に實現する力を得ることが出来ないからである。そしてこの點から見る時は、理想の力によつて人生が進歩すると共に、理想其のものも亦絶えず進歩するものであるといふことが出来る。然り、凡そ現實化といふことと聯關すると

なしには理想を考へることが出来ないし、更にまた進歩といふことと没交渉には理想を考へることも出来ないものである。實に理想は、實現すべきものであり乍ら永遠に完き實現が出来ないところに其れの妙趣があると共に、理想が創造力改造力たることはこの點から見て明らかである。

人生を斯くの如く見る時は、理想は現實を豫想すると共に、(既に一言したやうに) 件の現實を理想化——自己化し體系化し價值化して行くための努力を豫想するものである。これ、理想主義が、其れの十分な意味を持つがためには、必ず活動主義若しくは努力主義と提携しなくてはならない所以である。實に、吾々が非現實的な理想に全自我を委ねて安んずることが出来るのは、理想其のものが客觀的妥當性を有するがためであることはいふまでもないが、これと共に、人生の終局たる理想其のものの價值を現實化し具現する努力其のものを信ずるがためである。この意味に於て、理想主義は、やがて最も高い意味に於ける主觀主義であると共に最も高い意味に於ける刹那主義である。少くとも私は、理想を以て純粹に客觀的絶對的なものと見ないで、

主觀的にして客觀的なもの、相對的にして絶對的なものと見ると共に、理想を以て純粹に永遠的なものと見ないで、刹那を通してのみ其れの價值を認めることが出来るといふ意味で刹那的にして永遠的なものと見るものである。要するに、私から見れば、個人の性能と境遇と現在の努力とを度外視しては、理想は、存在の餘地がないのである。

五

凡そ人生は創造改造若しくは進化を本體とする限り、理想の價值は永しへに減びる時はない。併しながら、個人にあつても人類全體にあつても、時としては理想の價值が甚だしく蔑視され減却されることがある。斯くして文明史上「現實主義の時代」といふものが生ずることとなる。そしてこの時代には、哲學宗教の力、情意の力、若しくは信仰の力が衰へて、科學萬能の時代、理知萬能の時代若しくは懷疑主義虛無主義悲觀主義の時代となる。蓋し、矛盾と缺陷とに充ちた人生の現實を對象としてこれを分析的靜觀的に見るからである。そして、十九世紀後半の文明は正しくこの反理想主義

文明の典型である。我が國に於ても亦、所謂自然主義の時代はやがてこの反理想主義の時代である。

併しながら、理想の力が人生の存在するかぎり絶滅することがないと共に、理想主義の價值と職能も亦人生の存続する限り絶滅することがない。事實に於て、單に歐洲だけでなく、我が國に於ても亦文明の主潮は今や正しく理想主義の時代に其れの第一歩を踏み入れた。併しながら、それは文字通りに漸く理想主義の時代に入つただけであつて、思想・生活の全野に亘り、分裂と混亂とを極め、随つて思想にも生活にも眞の統一から來る力と深味とがない。換言すれば、我が國今日の文化は、未だ十分な獨立性がなく何れも皆借想的のものに過ぎない。然るに、底力と深味のある思想を持ち、底力と深味のある生活を生き、独自の文化を造らうとするに缺くべからざるものは、高大なる理想である。蓋し、理想は創造力だからである。この意味に於て、我が國の文化をして眞に優秀な價值あるものたらしめんがためには、何よりも、高大な理想——國民的理想を樹立することが焦眉の急務である。更に、低弱な民衆の熱烈な、併し

ながら混沌たる要求に火を點ずることによつて、單なる傾向として氣分としての理想主義の文明に、確實なる形象と内容とを附與するやうな大理想を掲げる偉大なる理想家の出現こそ洵に望まじきことである。併しながら、偉人の出現は望んで直ちに見ることの出來るものではないから、吾々は、只理想の價值を力説高調すると共に、自家一個の理想を出來るだけ高大なものとすることに主力を注いで、徐ろに偉大なる理想家の出現を待たんとするものである。

批評と人生

一

ショーペンハウエルが「生きんとする意志」を以て人間の本质と見たのは千古の卓見である。併しながら、彼がこの意志を以て盲目的のものと見たのは、所謂千慮の一失である。彼の厭世観は、畢竟するにこの生活意志を以て盲目的のものと見た所に其れの根源を有するものである。私から見れば、凡そ世に生活意志程聰明にして且靱強なものはない。吾々は、只彼れの聰明と靱強とを信ずるがためにのみ、全自己を彼れに委ねて安んずることが出来るのではないか。吾々は、只彼れの聰明と靱強とを信ずるがためにのみ、最後の指揮を彼れに仰いで甘んずることが出来るのではないか。如何なる場合——自殺の刹那に於てすらも——に於ても儼乎として存在し、そして斷然たる處決を爲すものはこの意志ではないか。更に、種々雑多な人間の性質の中で、最も聰明なものであり最も靱強なものであればこそ、これを以て人間の本质とも人性の眞髓とも見ることが出来るのではないか。然り。併しながら、斯の如き意味に於ける生活意志は、もとより單なる生存欲若しくは生活本能と似て而かも酷だしく趣を異にするものであることを忘れてはならない。

由來、人性乃至人生に於て、本質的のものは末梢的のものよりも時間的には後れて現はれるものである。少くとも斯く假定してのみ、吾々は生存のための努力を持続することが出来ると共に、人生の光——意味と價值とを見出すことが出来るのである。この意味に於て、いふ所の人間の本质としての生活意志も、それが相當の形で個人の生活に現はれるには、或る一定の時間を經過することを要するものである。勿論人間は其の出生の刹那に於て——嚴密には其の以前に於て——生きんとする欲求の發動を感じるものである。併しながら、其れは單なる欲求であり單なる本能であつて、十分な意味の生活意志ではない。蓋し、十分な意味で意志と呼ばれるには必ず目的の自覺を要するからである。この意味に於て、人間の本质としての生活意志は、生存の目的を自覺するものであり、随つてまた價值意識を伴ふものでなくてはならない。そし

て、いふ所の價值意識の根本屬性を形式的にいひ現はせば、よりよいものを欲するといふことであるから、嚴密な意味に於ける生活意志は、其の根本要素として必ずこの「よりよいものを欲する」といふことを包含して居なくてはならない。この意味に於て、私は、人間の本質を言ひ現すには、「生きたいとする意志」よりも寧ろ「よりよく生きたいとする意志」を以て一層妥當なものとするのである。この意味に於て私はまた、人間の本質としての生活意志が十分に發動するがためには、精神全體が或る程度まで發達することを要すると共に、明らかに一個の轉向點を通過することを要するとするものである。そしていふ所の轉向點とは、やがて「自覺」に他ならない。單に生きたい、單に生きたいと盲目的に欲求するだけではなくて、よりよく生きたい、よりよく生きたい、否、よりよく生きなくてはならないといふ、強いそして嚴肅な責任感を伴ふ欲望が發動すると共に、いふ所のよりよいとは何を指すか、よりよく生きるにはどうすればよいかといふことが、臆ろげながらも或る程度まで理解されて、即ち價值意識が發動した結果として、價值の標準規範たる理想が樹立され、隨つてまた理想主たる自

己の現在の本質や價值が明らかになることが、人間の本質としての生活意志が十分に發動するために要する轉向點としての自覺に外ならない。通例、人間が自覺を得た時にのみ、嚴密な意味で自我乃至人格が成立したものだといふことが出来るといはれるのは、畢竟するに、人間——自我の本質たる生活意志は、只この自覺の段階を通過してのみ十分に發動することが出来るものだからである。そして、一度斯くの如き段階を通過すれば、精神状態は一種の特色を帯んで、即ち、常に明らかな意識と強いそして独自の要求とに従つて内にも外にも向ふやうになるのである。一言にすれば、批評的になるのである。この意味に於て、自覺的といふことと批評的といふことは、略同一に見てよいのである。そして茲に所謂「批評」の意義と價值とを闡明する秘鑰がある。

二

批評的といふことを、斯くの如く、自覺的といふことと同一視する時には、「批評」を以て單に對他のものに限ることも、或は單に破壊的のものに限ることも、等しく

誤謬少くとも不完全の見解であることが明らかであらう。事實に於て、一切の批評は凡て自己批評を根柢源泉とするものであると共に、あらゆる批評は、皆何等かの意味で建設的のものである。蓋し、既に一言したやうに、吾々の精神が十分な意味の生活意志、即ち、よりよく生きようとする意志によつて統率され支配されるやうになつた結果として、他に對してもこの意志が發動するやうになつたのが、(對他)批評といふ作用を惹起す根源であり、随つてたとひ其れの形式や表面が如何程破壊的になり否定的になつて居ても、批評するもの、精神中には、何等かの意味でよりよいものを欲求するといふ要素、若しくは、何ものかをよりよくして行きたいといふ要素、一言にすれば價值改造の意志が存在して居るからである。この意味に於て、批評を以て單に他のあらさがしであるとか、他の缺點の指摘乃至非難であるとかする見解は斷じて謬見である。

勿論通例の解釋に従へば、批評は對他批評であると共に、其の大部分に於ては、對象の缺點の指摘であり非難である。そして茲に、批評が自覺と其れの根柢に於て同一

でありながら、而かも尙截然異なる領域乃至境界を有つて居る所以がある。即ち嚴密な意味に於ける生活意志——價值改造の意志を根源とし、第一に對象の現實的狀態(特に缺點弱所)を正視しようとする點に於て、兩者は揆を同じくしながら、自覺は全動的であり、自己を主とするのに對して、批評は發動的であり、主として他に對して積極的に有意的に働きかけるものだからである。要するに、通常の意味の批評は生活意志の自覺的發動たる改造の意志を以て他と有意的に交渉する作用である。随つて、批評に缺くべからざる要素は、其れの動力としての改造の意志と、其れの標準としての規範理想と、其れの過程としての價值判斷とである。更に具體的にいへば、價值ある批評は、其れの出發點に於ては、對象を出来るだけよくしたいといふ改造の意志が純粹であると共に、其の結果に於ては、改造の効果が明確に現はれるものであり、更に其れの方法過程若しくは作用に於ては、常に對象の真相眞價を明らかにするだけでなく、一步を進めて、如何なる所に缺點の原因があるか、そして如何にすれば其れの長所を助成し、且其れの缺點を匡救することが出来るかといふことを、出来るだけ明白

に、出来るだけ有効に暗示し解明するものでなくてはならない。これ、嚴密な意味に於ける批評は、凡そ如何なるものでも、其れに於ける精神に於ては革命乃至創造でなくて寧ろ改良若しくは改造であり、其れの様式に於ては體系比喩乃至感想ではなくて判定推論若しくは討議である所以に他ならない。

三

繰返していふ。批評は改造の意味を以て爲される價值判断である。改造の意志を以て爲されるものであるが故に、單に對象の真相眞價を判断し認識し理解することだけに止ることが出来なくて、更に能動的に對象と内面的の交渉を試みるのである。随つて、嚴密な意味に於ける批評は、「知らんとする意志」が満たされた所を以て其の發足點とすると共に、必ず賞讃(對象の長所に對して)及び非難(短所に對して)の情を伴ふものである。蓋し、批評又は批評せんとする意志は、其れの根源に於て、必ず對象に對する改造の可能と必要と責任とを感じるのに對して、知らんとする意志は、單に知ること其のことに興味を感じるだけであつて、多くとも、單に、改造の可能を感じる

だけであつて、其れの責任は勿論、其れの必要すらも十分には感じて居ないからである。換言すれば、批評者が批評の興味を觸發されるのは、單に對象に缺點があることを知つて居るだけではなく、更に件の對象の缺點を匡救するに足る力量が自己に具つて居るといふ價值改造の可能を信じて居ると共に、この信念この豫想を事實化するとは自己の責任であるといふ道德意識の觸發を感じるがためである。一言にすれば、對象に對して、最も高い意味の「愛情」を感じる時にのみ批評せんとする意志の發動を見るに至るのである。いふ所の最も高い意味の愛情とは、勿論利己的主我的のものではなくて、對象の價值を高めること——對象をよりよくすることを主眼とするものであり、對象を眞理の光に照さうとするものである。蓋しこの意味に於ける愛情のないものは、對象の短所を見出すことが出来るけれども、其れの長所を正しく認め、且それを賞讃し助長するといふ雅量又は好意を缺くものであり、たとひ其れの短所を認めるとも、其れの原因を探查して匡救の途を講じようとする誠意が發動することなく、只徒に其れを指摘し非難し排斥し嘲笑し輕蔑するに過ぎないからである。

更に、いふ所の愛情が、一步を進めて人道的精神となる時に於て、批評の倫理的價値が最も十分に現はれるものである。即ち、對象の長所を賞讃するのは、それが單に對象のみの長所だからではなくて、實は自己乃至人間全體の共通財産だからであり、對象の短所を非難するのは、それが單に對象のみの短所ではなくて、實は自己乃至人間全體に共通する短所だからであるといふ、深遠なそして廣汎な自覺——責任の自覺を根柢とする時には、批評は對象の眞價を正視することを通して自己の眞價を反省し、倒次に、自己の眞價を規準とすることに依つて對象の眞價を認識することになるから、批評者は單に他を批評する興味や自信を感じるだけではなくて、寧ろどうしても批評しなくてはならないといふ嚴肅な責任感を痛感するものであり。随つて批評は十分な倫理的必然性を有するものとなるのである。

改造を目的とする批評は、勿論單なる否定破壊ではなくて、寧ろ否定を通しての肯定であり、建設のための破壊である。即ち其の結局に於て、對者に何等かの利益を與へようといふ愛情と誠意とがあつてのみ、對者に何等かの利益を與へ得るといふ自信が

あつてのみ、更に對者に何等かの利益を與へずには居られないといふ責任感があつてのみ、始めて有効な批評が出来るのである。蓋しこの愛情と誠意と自信と責任感とが批評者の心事を公正にし、其れの態度を嚴肅ならしめるからである。彼は、勿論批評の可能——對者の短所の指摘と匡救の可能とに對する自信に伴ふ矜恃を感じては居ながら、而かも出来るだけ其れを抑制することによつて只偏に對象の眞價を正しく認識しようとするのがためである。自己の卓越性を誇示することの愉快を知つて居ながら、而かも件の欲求を阻止して出来るだけ十分に對者の長所を肯認し賞讃しようとするのはこれがためである。更に、對者からは怨恨と憎惡とを受け、世間からは冷酷残忍のものに見られることを憂慮しながら、而かも件の憂慮を排除して、出来るだけ嚴正に出来るだけ峻烈に對者の短所を剔抉し非難しようとするのはこれがためである。この意味に於て、批評者は最も高い意味の愛情——價値改造の意志を批評の動機としなくてはならないといふことは、批評者の心事は敬虔であり謙抑であり冷靜であり眞摯であり公正でありながら、而かも熱烈であり峻嚴であり傲岸でなくてはならないと

いふことである。倒まにいへば、批評者の心事は傲慢であり冷刻であり無反省であり不謹慎であり粗雑であり浮薄であり偏狭であり矯激であつてはならないといふことである。随つてまたこの意味に於て、批評の価値はやがて批評者の態度の価値であると共に批評者の人格の価値であるといはなくてはならない。否、態度は人格の一部分であるが故に、批評の価値はやがて直ちに批評者の人格の価値であるといはなくてはならない。人格の低劣なもの、心事の醜陋なもの、態度の嚴正を缺くものに眞に卓越した批評の出来ないのは、蓋しこれがためである。否、事實に於て、古來大批評家といはれるものは凡て皆高潔な人格者であつたことは、一々事例を擧げるまでもなく極めて明白なことである。

四

批評の動力は改造の意志であるといふことは、やがて批評は価値の改造であつて創造ではないといふことを意味する。そしてこの點にこそ、批評の独自の意義と価値とがあると共に、また其れの限界がある。既に一言したやうに、批評は一種の価値判断で

あつて、或る種の価値が既に存在すること、件の価値が改造の可能性を有つて居ること、を豫想するものである。そして、批評が一般の価値判断と異なる所は、それが形式的には価値判断の価値判断であるといふ重複性を有つて居ることにあるし、内容的には所謂改造の意志を動力とする最も積極的な価値判断即ち改造的価値判断たることにある。

斯くの如く、批評の本質を以て改造性にあるとする時には、批評は當然対象の具有する価値を以て中心としなくてはならない。いふ所の意味は、有効な批評を行ふには何よりも先に対象の具有する価値を正確に理解することを要すると共に、其の価値を批判するには其れの対象の具有する目的標準を以て主としなくてはならないといふことである。斯くして、批評は單なる理知的判断乃至認識の境地を脱して、所謂評價となり鑑賞となり味解となると共に、超越批評ではなくて、所謂内在批評となるのである。所謂藝術批評或は審美批評を行ふ際に、單に理知的判断を主としたり、或は事實的方面に偏したり、或は更に道德的標準を以て律したりすることの誤れる所以も亦こ

にある。

但し、批評の本質を斯くの如く解する時には、批評の可能性を滅殺する虞——否批評を不可能ならしめる虞がないでもない。蓋し、情意作用は本来甚だしく個別的特殊的なものであると共に、嚴密な意味で自己以外の對象の具有する目的標準に照して内在的批評を行ふといふことは到底不可能のことだからである。併しながら、凡そ人生の營爲は、結局何等かの假定なしには行はれるものではない。認識に於ても、本當に正確に理解し得るものは恐らく一つもあるまい。最も容易なるべき筈の「自己を知る」ことそのことすら、最も困難な、寧ろ不可解な問題として千古に互つて居るではないか。實に、人生の興味と價值とは、結局不可能を可能としようとして努力する所にあるのではないか。人生其自身が *Problem*——*Eternalproblem* である所にこそ、永遠に悉きない悲しみと喜びとの交響樂があるのではないか。随つて何等の假定なしに眞に徹底的な理解を得ようとするものは、遂に懷疑の奥底に悶死する外はあるまい。この意味に於て、批評を可能ならしめるには、少くとも二つの假定を要する。一つは價值

意識の共通性即ち廣い意味で認識の可能性であり、一つは價值改造の可能性である。

吾々は前者の假定にたよつて對象の價值に對する主觀的の感じ心持——好惡善惡美醜眞僞の感じを客觀的妥當性を持つものとして表白するのである。但し批評は、幾度も反覆したやうに其の目的が對象の價值を改造することにあるから、單にこの假定にたよるだけに止らずに進んでいふ所の客觀的妥當性を出来るだけ充實せしめるやうにしないでならない。そしてそれがためには、所謂情意判斷或は印象直覺感銘を、其れの具象性眞實性乃至鮮活性を失はない範圍に於て理知化し論理化しなくてはならない。これ曩に私が、批評は其の様式に於て討議推論であるといつた所以に他ならない。即ち、情意判斷の由つて生ずる根據理由——價值標準と其れの過程とを合理的に説明することによつて、感情より理知に、印象直覺より討議推論に轉化してのみ、換言すれば、論理化された直觀又は前提及び過程の明らかな斷定となつてのみ、批評は其れの目的たり職能たる對象の價值改造を十分ならしめることが出来るのである。價值改造の可能性を豫想することは、勿論單に批評を可能ならしめることであるば

かりではなく、實は寧ろ、生活其のものをして可能ならしめることであるのは、私の劈頭論じた所である。そして、件の人生の根本假定の事實化を以て其れの意識的目的とする所に、批評の人生的意義が存するのである。即ち批評は、文字通に新價値を創造することによつて人生に貢献するのではなくて、既存の價値に對して斷えず改造の動力を與へることによつてのみ、人生の進歩に資益するのである。斯くして、批評は何よりも「獨斷」と「模倣」とを排斥するものである。蓋し、「獨斷」は、或る既存の價値標準を以て絶對的永遠的に價値ある教權とし、一切の新經驗新事實即ち新らしい價値體をそれに照して惰性的因襲的に取扱はうとするのであると共に、「模倣」は、他の價値標準を何等の檢覈をも加へることなしにそのまゝに採用して、自己の主觀的發動乃至新經驗新事實の價値を決定しようとするものであるのに對して、批評は、一面に於ては、自己の價値標準乃至價値意識は果して一般に通ずる客觀的妥當性と、絶えず新經驗に十分に適應する伸展性乃至融通無礙性とを有するか否かを反省すると共に、他面に於ては、他の價値標準は、果して自己及び一般にとつても價値あるものであるか否かを檢

覈することによつて所謂獨斷を説理的判斷にし、所謂模倣を獨創ならしめるものだからである。この意味に於て、批評は對象の理解認識による内在的超越作用であると共に、自己の反省認識による自己超越作用であるといはなくてはならない。批評の本質が改造にあることは、この點から見ても亦明らかでないか。

五

批評が獨斷と模倣とを排するといふことは、やがて極端な進取と極端な保守とを排して、本當の意味の進歩を主眼とするといふことである。古來批評を生命とする哲學が、科學と宗教若しくは智識と信仰とに對して調和者の地位に立つて居るのは、要するにこれがためである。蓋し、科學や智識は奔放自由を尊ぶ結果極端な進取に傾くのに對して、宗教や信仰は穩健質實を旨とする結果極端な保守に偏するからである。そしてこの點から見て、私が批評の心理的性質を以て、單に理知的のもの、即ち判斷比較分類等と見る主知的見解、及び、單に感情的のもの、即ち賞讃非難等と見る主情的見解ばかりでなく、更にこの兩者を併せ兼ねた所のもの、即ち理知と感情との協同作用

たる鑑賞評價等と見る見解をも凡て排して、嚴密な意味に於ける個的生活意志を根柢とし、其れが自覺的過程を経過した結果、所謂最も高い意味で理性的に作用したものであり、随つて精神の全體の根柢的作用であるとする意味の主意的見解を採用すると共に、哲學を單に主知的のものとする見解に反して、この意味の「批評の學」若しくは「理性の學」とするものである。

批評が改造力であるといふことは、やがて批評が自我乃至人生の統一力であることを意味する。更に適切な用語を用ゐるならば、統率力であることを意味する。いふ所の統率力とは、統一すると共に率ゐる力である。そして本當の統一は、其れの動力が外にあるものではなくて、統一されるもの、内部に本具されるものである。この意味に於て、批評は内面的のものであると共に動的のものである。随つて、批評を統率力であると見ることは、一見批評の語源たる「クリナイン」の原義即ち「區劃」「辨別」「判別」といふこと、乖離するかのやうに思はれるけれども決してさうではない。蓋し眞の統率は、多の中に一を認め、雜多の中に統一を見出し、分化すればする程統一の度

が益々緊密になつて行くことだからである。實に批評は、既に述べたやうに、昏に進取と保守、理知と信仰、科學と宗教乃至多と一とを統一するだけではなく、更に懷疑と獨斷、否定と肯定、破壊と建設、亂雜と硬化、悲觀と樂觀、非難と賞讃、舊と新、過去と將來、自我と非我、主觀と客觀、個と全、精神と物質、相對と絶對、思想と實行、學理と實際、形式と内容等の對立的二元的要素、即ち一面的皮相的といふ意味での抽象的要素を具象化し全體化し根柢化することによつて、斷えず伸展し成長し行くものたらしめようとする點に於て、最も十分な意味の統一力であり、統率力であり、更に自由力であり、解放力である。随つて、この意味に於ける批評が十分にその効力を發揮する所には、個人に於ても社會乃至時代に於ても、斷えざる進歩と生氣と自由とを見ることが出来るのは事實の明らかに證明する所である。私が自覺を以て、單に自我の現實性を冷やかに反省し認知することだけと見る一般の見解を排して、其れの要求理想の方面をも認めることであるとしたのは、更に一層適切な發想法に従へば、自我のあること、あるべきこと、の兩面を見て、あることよりあるべきことに成るこ

とを主眼とするとしたのも、畢竟するに、自覺を以て批評の骨子たる自己批評の一過程であると共に、批評の本義を以て上に述べたやうな意味に於ける統率力乃至統一力と解するがために他ならない。批評を以て單なる冷たい理知一偏の作用と見たり、單なる分析破壊否定の作用と見たり、單なる懷疑反抗の作用と見たり、或は單なる現實的精神の作用と見たりすることの誤謬であることは、この點から見ても明らかなることである。

六

繰返していふ、批評の意義と價值とは、個人に對しても人生に對しても、改造力たる所に存する。嚴密には對象に即する改造作用たる所に存する。併しながら、更に審に考察する時には、批評の精髓たる價值改造には、對象の中の隠れたる價值を發見し不完全な價值を匡正すること、其れの不足不完全な所を補足することによつて出来るだけ完全十分なものとすること、の兩面がある。この意味に於て、批評は單に與へられた價值の同量同質的分析ではなくて、寧ろ、批評者と被評者との交渉によつて生

ずる異量異質的綜合(勿論分析を通じた)であり、隨つてその結果から見れば、有効な批評は、必ず批評前には批評者の中にも被評者の中にも現はれて居なかつた新しい價值が創造され發見されることとなるのである。そして茲に、やがて批評の創造性がある。但し、いふ所の新價值は、嚴密にいへば批評者及び被評者本來の價值を全然超越するものではなくて、寧ろ兩者の中に伏能體として内在して居たものが交渉の結果として新らしく具現されたものであるから、依然として改造作用であるといはなくてはならない。少くとも、批評は一種の創造——間接的創造、對象に即する創造、又は創造の原動力であるといふことが最も妥當である。そしてこの點に、批評と所謂創造との相違があり、更に具體的には評論と創作、評論家と作家、及び批評家と作家との差異または關係がある。

世には評論(評論家)を以て創作(作家)よりも、批評(批評家)を以て實行(實行家)よりも一段劣つたものとする許りでなく、兩者は全然反對し乖離するものゝやうに思つて居るものも少くないが、これは甚だしい謬見である。蓋し、嚴密な意味で新價值

の創造といふことは容易にあり得ることではなくて（但しベルグソンのやうに時を創造的進化と見る時は別であるが）、大抵は改造であり、随つて評論と創作とは單に様式上資料上の差であると共に、創作又は實行なるものは、（否一切の生活は）其れが價值あるものとなるためには、必ず廣い意味の批評の力に俟つべきものであり、そして批評と創作又は實行とは、決して反對するものでも排斥し合ふものでもなくて、寧ろ優秀な人格の中には巧みに調和し得るものであることは、吾々の經驗及び歴史的事實の明證する所だからである。

但し、人性の最も微妙奥祕な點若しくは自我の眞髓乃至生活の核心は、批評を内在的に超越して、自我が純一無雜、緊張充實のすがたを保つた時にのみ現はれるものであり、随つて、批評的生活が價值生活の全體ではないと共に、作家實行家には批評家よりも卓越した人物が、少くとも在來は多かつたといふことは疑ふべからざる事實である。この意味に於て、人生の究極目的はいふまでもなく新價値の創造であり、随つて批評の價値は、畢竟するに最も高い意味に於ける方法の價値であり手段の價値であ

るに過ぎない。心の欲する所に従つて矩を踰えぬ三昧の境地に到達したものは、勿論批評を無用視してよい。併しながら、周匝な戒心と斷えざる努力とを以てしてさへも、ともすれば、自我の緊張が破られ生活の伸展が阻まれ勝ちな常凡人にとつては、批評の力に俟つて歩一步よりよき生活に向ふ外に意義ある生活を生きて行く道はない。この意味に於て、批評の人生に於ける價値は、批評的精神の個人の自我乃至生活に於ける價値と同様であり、随つて個人に於ても社會に於ても生活の改造を念とするものは必ず批評又は評論の價値を重視しなくてはならない。

七

餘りに長い間模倣と獨斷の甘い夢に耽つて居た我が國も、今や漸く「批評の時代」に其れの第一歩を踏み入れた。いふ所の意味は、勿論單に評論壇が旺盛になつたといふだけではなくて、一層根柢的全體的な意味で人心が自覺的批評的になつたといふことである。思想學術の獨立が絶叫せられ、國民性乃至民族精神の自覺が要望せられ、哲學的興味が勃發し、殊にカント哲學乃至新カント派の哲學——批評哲學が歡迎せられ、

更に文藝界の傾向が自然主義より最もよい意味の現實主義即ち新理想主義に向ひつゝ、ある最近の諸傾向は、等しく皆時代が批評的自覺的境域に入つたことの證據でなくて何であらうか。そして私は、この傾向を將に來るべき「創造の時代」の前驅であると見ることには於て欣びを感じるのである。

併しながら、審に現代の思潮を観察するに、私は、いふ所の批評的傾向には、未だ甚だしく不徹底なそして不純な分子の介在することを見逃すことが出來ないことを憾みとする。甚だしきは、批評時代に漸く第一步を踏入れたゞけの今日に於て、既に一足飛に創造乃至獨創の時代が來たかのやうに誤信するものすらもあるではないか。私から見れば創造の時代は只この批評的傾向が徹底的境地に到達した時にのみ自ら開かれるものである。随つて、我が國の今日の如く、これまで未だ一度も本當の啓蒙時代乃至現實主義の時代を経過したことはない所に於ては、斷じて空疎な理想や似而非獨創に憧れることなく、何よりも先づ、其れの根柢を鞏固にし、其れの内容を充實することに主力を注がなくてはならない。そして、それがためには、批評乃至評論の價値

を尊重し、そしてそれを、單に職業的の批評家、殊に學殖に於ても識見に於ても甚だしく貧弱低級な文藝批評家のみ手に委ねて置くべきものではない。實に今日の我が國は、豊富にして精緻な學殖と、高邁にして卓抜な識見と、透徹にして深邃な洞察力と更に、廣汎にして博大な理會力とを有する眞の批評家——國民を十分な自覺的境域に導き、國家文明をして健全な進歩の道程に上らしめるに足る眞の人生批評家乃至眞の文明批評家の力に俟つことの最も急な状態にあるものである。この意味に於て、私は本來批評を職能とする哲學の研究者中只一人の卓越した批評家をも見出すことが出來ないことを最も遺憾に思ふものである。

文明批評の意義

一

最近の我が言論界に於ける一個の顯著な現象は、文明批評の盛行といふことである。レヴィウ本位の雑誌はいふまでもなく、文藝本位の雑誌まで競つて文明批評を掲げ、文明批評家としての天分教養あるものはいふまでもなく、文藝批評家まで我劣らじと文明批評を試み、甚だしきは、小説や戯曲や詩歌の作家まで、夫々の創作を通して文明批評を試みつゝあるのが最近の我が言論界に於ける一個の、乃至は最も顯著な現象である。そして私から見れば、この現象は、我が國家乃至世界の状態と言論家の心理状態とを背景とし源泉とする當然必然の現象であるばかりでなく、言論家のためにも亦我が國家のためにも極めて喜ぶべきことである。蓋し今日の我が國は（更に大きくいへば世界は）、文明の大轉換期に遭遇してゐるために、研究し解決すべき重要問題が極めて多く、随つて苟くも思想界に生活するもの、興味と必要とは、何よりも先

にこの方面に向ふのみならず、斯かる文明の危機に於て、個人と國家とを問はず、凡そ蹉跎なく生活を更新し得る道は、只嚴密な意味に於ける批評の力に俟つ外はないからである。

併しながら、翻つて、文明批評家と稱せられる人々の言説及び文明批評を目指してゐるらしい論議を審に攷覈する時に、私は、何時も甚だしい不満を感じずにはゐられないものである。蓋し、私から見れば、現今の我が國には文明批評家らしいものばかりに多く、文明批評らしいものは更に多いけれども、眞の文明批評家も眞の文明批評も至つて少いからである。これは果して何故であらうか。いふまでもなく、其れの主因は、文明批評は本來困難なものであるといふことに存するが、而かも亦文明批評を試みようとするものが、文明批評の意義を理會することなく、文明批評家としての教養を積むことを怠つてゐることが、たしかに其れの一大原因でなくてはならない。然らば、文明批評の眞義は何處にあるか、文明批評家となるには如何なる素養教養が必要であるか。以下、極めて簡潔に私の所信を披瀝して、世の文明批評に志ある人々

の反省を促すこととする。

二

改めていふまでもなく、批評は其の目的・標準・対象及び方法(態度)の相違に従つて、いろいろに別つことが出来るものである。其の中、特にこれを其の対象に就いて見るに、これにも亦種々の差別がある。第一にこれを價値の差別に従つて區分する時には、學術(科學及哲學)批評・藝術批評及び倫理批評となる。第二にこれを批評者の自己其のものを直接対象にするか自己以外のものを直接対象とするかに従つて、自己批評と對他批評となり、尙對他批評は、個的對他批評と團體的對他批評となり、更に團體的對他批評は社會批評と歴史批評となり、最後に人間生活を自他縦横に分つことなくこれを全體として見る時には、人生批評と文明批評となる。

斯くの如く、文明批評は、人間生活を全體として見るところに、換言すれば、全體としての人間生活を対象とするところに、其の獨特の興味も困難も存するのである。蓋し、上に述べた諸種の特種的部分的批評を統一することによつて、人生を斷えず調和

的にそして根底的に改造する——發達させるのが文明批評であり、随つて、この重大な使命を果し得るものは、只人生各種の方面に對して平等に興味と理會とを有するばかりでなく、更に其の何れにも偏せず、且其の何れをも捨つることなく、人生の根柢源泉に立脚し、人生の精髓核心を把握してゐるものゝみだからである。

但し、全體としての人生を対象とする批評には、既に述べたやうに、文明批評の外に人生批評がある。然らば、この兩者は果して如何なる關係異同を有するであらうか。文明批評と人生批評とは、通例はそれ程嚴格な區別を附されてゐないし、事實に於ても理論に於ても嚴密に區別し得べきものでもないが、今便宜上これに區別を施すならば、前者は、全體としての人生を対象としながら、而かも其れは、人生の本體的普遍的方面を主眼とし、且其の基調が普通の意味に於て倫理的であるのに對して、後者は前者と同様に、全體としての人生を対象としながら、而かも其れは、より多く人生の現象的特殊的方面を主眼とし、且其の基調は必ずしも普通の意味で倫理的ではなくて人生各般の事象に互つてゐる。併しながら、人生を本體的方面と現象的方面又は普遍

的方面と特殊の方面とに別つことは、勿論便宜上のことであり譬喩であるに過ぎないから、人生批評と文明批評とを全然別なものとするのは抽象的謬見である。

但し、茲には、上の便宜的譬喩的區分法を採用して、文明批評を以て現象的特殊的方面を通じて、全體としての人生の改造を試みる批評であると見る時には、吾々は更に文明批評と歴史批評及び社會批評との關係異同を明らかにしなくてはならない。蓋し、人生の現象的特殊的方面とは、一定の時間と空間とに制限せられ條件付けられたものとしての人生、即ち、特殊の歴史と特殊の社會とを有する人生であり、そして、前者を批評の對象とするものは歴史批評であり、後者を批評の對象とするものは社會批評だからである。然らば、文明批評と件の二つの批評とは如何なる關係異同を有するであらうか。

或る事件、或る時代、或る社會を歴史の一段と見て、其の意味と價值とを明らかにし、且其の改造を試みようとするのが歴史批評である。そして、これは畢竟するに或る問題(事件・時代・社會)を時間的に連續する全體の一部として見ようとするものである。

るから、其の批評の方法は、いふまでもなく因果法であるが、而かも歴史的因果律は機械的因果律と異り、同量的ではなくて、因と果との間に發展進化の餘地があるものであるから、其處に歴史批評の面白味と同時に困難があるが、併し、其れは結局發生的であり回顧的である。随つて、この批評法は、或る問題(事件・時代・社會)の起源乃至歴史的價值を明らかにすることは出来るけれども、必ずしも其の本質を明らかにすることは出来ないし、勿論また改造の動力を見出すことは出来ない。蓋し、人生の事象は、單に過去に照して見るばかりではなく、更に理想に照してのみ其の眞價と改造の方針とを闡明することが出来ると共に、ひとりこれを縦に見るのみならず、更に横に見てのみ其の眞相と改造法とを理會することが出来るものだからである。この意味に於て歴史批評による價值の改造は、時代錯誤に陥ることはないが空間錯誤に陥つて切實を缺き、空想に墮することはなからが回顧的機械的となつて力を失ふに至るのが通弊である。

社會批評とは、現實當面の社會を對象とし、これを其の時代其の社會の有する標準

に照して部分的表面的に理會し、改造することを主眼とするものである。随つて、この批評法による時には、問題が、或る限られた時代の或る限られた社會に於て如何なる意味と價值とを有するかを明らかにすることが出来るけれども、それが歴史的に如何なる意味と價值とを有するかを明らかにすることは出来ない。随つて又、この批評法による價值の改造は、歴史批評と反對に、空間錯誤に陥ることはないが時間錯誤に陥つて確實を缺き、切實を失ふことはないが餘りに皮相的部分的に偏して根本に徹し全體に行き互ることが出来ないのが通弊である。即ち、社會の一部分乃至表面にある缺陷弱點を指摘し、其の直接の原因を指摘して、應病與藥的の匡救法を施すことは出来るけれども、其の根源を索め究めることによつて根本的の匡救法を講ずることが出来ないのである。

三

歴史批評の眞實を採用して而かも空間錯誤に陥らず、社會批評の長所を包攝して而かも時代錯誤に流れず、縦に全過去を背景とし横に全世界を考慮し、時空に即して而

かも時空に囚はれず、特殊を基點として而かも全體を忘れないものが、やがて謂ふ所の文明批評の眞髓である。然らば、如何にすれば斯くの如き意味に於ける文明批評は可能であらうか。一言にすれば歴史批評と社會批評とを双脚として人生批評を行ふことを外にして途はないのである。換言すれば、各々部分的皮相的改造たる歴史批評と社會批評とを人生の根本原理又は最高目的に照すことに依つて統一し、内面化し、普遍化し、斯くして眞に全體的根柢的改造力を得しめることを外にして途はないのである。實に、文明批評は、人生の事象を兩面から見て、時間的に其れの歴史的意義を明らかにすると共に、空間的に其れの社會的意義を明らかにすることによつて、其れの眞相を闡明すると共に、これを人生究極の目的乃至最高の意義に照すことによつて其れの眞價を判定し、且其れの改造の標的と動力とを見出すことを主眼とするものである。要するに、文明批評と歴史批評及び社會批評との相違は、單に、人生究極の目的乃至最高の意義に照すか否か、徹底的——全體的根柢的であるか否か、といふことにある。眞の文明批評と似而非文明批評——歴史批評とが容易く區別することが出来ないのは

蓋しこれがためである。

尙讀者の理會を便にせんがために、試に以上の文明批評の眞偽の區別を具體的に説明して見よう。便宜上この度の「大戦争」といふ問題を例として見るに、第一に、これを歴史上の一事件として見、過去の類似の事件、たとへばナポレオン戦争とか或は我が國の日露戦争とかいふものと比較して見たり、又は其の原因を探究したりして批判を下すものは歴史批評であり、第二に、これを戦争の状態又は戦争に聯關して起りつゝある社會状態の變化などから批評を下すものは社會批評であり、第三に、上記の両面から見ると共に、兩者から得た批判を最後の批判とはしないで、更にこれを人生究極の目的乃至最高の意義に照して最後の斷案を下し、更に進んで將來の方針をも講ずるものが即ち眞の文明批評である。

文明批評を斯くの如く見る時には、文明批評家たることは決して容易なことではない。文明批評家となるには、少くとも、歴史・社會及び全體としての人生に關する正確にして豊富な知識を持たなくてはならない。換言すれば、文明史的知識と、社會的乃

至社會學的知識と哲學乃至文化學的知識とを持たなくてはならない。然るに、現今の文明批評を試みるものを見るに、これらの資格を備へたものは至つて少くて、多くは前二者の何れかを主とするに過ぎない。彼等の批評が多くは歴史批評か社會批評かの圏内を脱し得ないのも所以あることではないか。否、更に換言すれば、現今の文明批評と呼ばれるものは、大抵低級な社會批評に過ぎないのである。この意味に於て私は「文明批評に哲學的根柢を興へよ」と要望することの極めて必要なことを痛感するものである。

然らば、上記の三つの資格だに備はらば、眞の文明批評家となることが出来るであらうか。私から見れば、斷じてさうではない。蓋し、私の信ずる所に従へば、ひとり文明批評だけでなく、凡そ一切の批評は、自己批評を根源とするものであり、凡そ一切の價值ある批評は、卓越した自己批評の精神乃至自己改造の精神即ち理想的精神を源泉とするものであり、随つて、優秀な文明批評家たらんとするものは、先づ卓越した自己批評の精神を持たなくてはならないからである。そして、これは單に批評の本

質から見てさうであるばかりでなく、更に文明其のもの、本質から見てもさうである。然らば、謂ふ所の文明の本質とは果して何を意味するであらうか。

四

既に一言したやうに、抽象的に見れば、文明とは時間と空間とに条件づけられた人生である。更にこれを一層具體的に見れば、文明とは、全人類が個人としての自己の生活意志を出来るだけ十分に出来るだけ自由に實現せんがために、時間的にも空間的にも相互に協同して生み出し、生ひ立て、維持する所の共通財産、即ち改造された人間生活の内容及び様式の全體である。生活意志を十分に實現せんがためには、生活意志其のもの、分化と統一とが必要であると共に、意志を實現するに適當な手段を造る力がなくてはならないし、生活意志を自由に實現せんがためには、手段を益々精巧ならしめると共に、これを愈々有効に活用する力がなくてはならない。斯くして、文明は旺盛な生活意志と聰明な理知との力に俟つものである。

併しながら、既に一言したやうに、文明の成立には一定の時間的條件と空間的條件とを要するために、文明は人類共通の財産であり随つて只一つだけしかないものでありながら、時間的條件と空間的條件とそれの原動力たる人類の種族との相違に従つて、其の間に種々の差別を生ずることとなるのである。上古の文明とか近代の文明とか、東洋の文明とか西洋の文明とかいふのが、即ち其の主要なものである。

既に述べたところから見て明らかやうに、文明は人間の生活意志——人生の目的を離れて存在しないと共に、件の意志目的を實現する方法を離れても存在することが出来ない。随つて、文明は、上記の區分法の外に、便宜上件の目的及び手段を生み出し、改造し、更に目的實現の意味と價值とを理會する方面と、單なる手段の方面とに別つことが出来る。そして、前者は、文明の本源的・内面的・實質的方面で、比較的に動的な随つて特殊的個別的なものであり、後者は、文明の末梢的・外面的・形式的方面で、比較的に靜的な随つて一般的共通なものである。前者は普通精神文明或は文化乃至人文の名を以て呼ばれ、後者は普通單に文明又は開化と稱せられる。されば、十分な意味に於ける文明批評を試みようとするものは、これらの各方面を包括するやう

にしないでならない。

さて、斯くの如く、文明の本源は人間の生活意志、精しくは個人の生活意志に存するにも係らず、世には、文明を以て全く個人の生活意志以外に存在するもの、如くに見做してゐるものも少くはないが、これは勿論斷じて謬見である。實に、文明が進歩發達を生命とするのは、進歩發達を生命とする生活意志其のものを源泉とするからである。事實に於て、人間の生活意志に満足を與へない文明は衰滅する。随つて、文明の本質を批評する上には勿論、これを理會する上にも、文明の源泉たる生活意志——生命乃至人間の本質を忘却してはならない。そして、人間の生活を如實に理會するには只自己其のもの、生活意志を反省する外に途はないのである。これ私が、眞の文明批評家たらんとするには、卓越した自己批評の精神を持たなくてはならないといつた所以に他ならない。

改めていふまでもなく、自己批評の精神は最も高い意味の自覺的精神即ち理想的精神である。そしてこの精神を根源とし、人生の最高目的を標的として、時間と空間とに

條件づけられた人生——實人生に對するものが、やがて文明批評である。換言すれば、自己批評を出發點とし人生批評を到達點とする歴史批評社會批評が、やがて文明批評である。實に文明批評は自己批評を其の出發點とすることによつて、抽象的に墮することを免れ得ると共に、人生批評を其の到達點とすることによつて、普遍的妥當性を得ることが出来るのである。換言すれば、人間の本質を理會することによつて文明の源泉に遡着し、人生の眞髓を觀破することによつて文明の根柢に穿到すると共に、普遍的價值ある理想を樹立し、且これを實現しようとする誠意を以て當代の文明に對し、正確にして豊富な文明史的知識と社會的知識とを活用し、最後に、批評の對象とする問題を自己の問題として徹底的に取扱ふことによつてのみ、眞の文明批評が出来るのである。

五

理想は、凡そ如何なる場合に於ても力である如く文明批評に於ても亦其の原動力である。そして文明批評は、其れの對象たる文明が進歩を生命とすると共に批評其の

もの、職能が改造にあるといふ二重の意味に於て進歩的のものである。随つて、眞の文明批評家は、如何なる人よりも進歩的な人でなくてはならない。然り、文明批評乃至文明批評家の任務は、畢竟するに、文明をして斷えず健全なそして駸々たる進歩をなさしむるところにある。停滞し、屈曲し、逸脱せる文明の大道小路を、文明其のもの、本質と最高理想とに照して正道に引戻し、歸趨に迷ひ進路を失つて踟躕狐疑し失望落膽する民衆と、目前の歡樂に酔ひ、低級の幸福に飽滿して、墮落の懸崖に危険なる儉安の墮眠を貪りつゝある同胞とに、生活改造の力と光とを與へることによつて、榮ある新文明創造の道程に上らしめることを他にして、文明批評の職能は何處にあり、文明批評家の使命は何處にあらうぞ。

今や舊い文明は倒れた。併し、新らしい文明は未だ創造されてはゐない。文明の過度時代。新文明創造の時代。あゝそれが現代の、少くとも我が現代の状態ではないか。然り、我が國は今や正しく過度時代である。大小百般の問題が、未解決半解決のまゝに磊々として轉輾してゐる今日の我が國に於て、甚だしい時代錯誤や空間錯誤の

多いのは、悲しいかな、極めて當然のことである。

併しながら、斯くの如き當然をして永しへに當然ならしめる時には、國家は衰滅を他にして途はない。若し吾々にしてこの非境に沈溺せざらむとするならば、一刻も速やかにこの病的状態を脱しなくてはならない。然らば如何にすればこの目的を達し得るであらうか。いふまでもなく、それは卓越した文明批評乃至文明批評家の力に俟つ外はないのである。然るに、既に一言したやうに、我が國現今の文明批評乃至文明批評家と呼ばれるもの、多くは、似而非なるものであるのを如何にしよう。

我が國現今の文明批評家(?)達に對する私の不満は甚だ多くして而かも痛烈である。併し、今は其れを詳述する暇を持たない。只私の一刻も忘れることの出来ない最も大きな不満は、文明批評を試みるものの中には、知識あるものはかなりにあるが、眞に誠意あるものが皆無といつてもよいといふことである。聰明らしいものは多けれども、熱烈なものが皆無といつてもよいといふことである。換言すれば、氣の利いた言論を弄して俗衆の喝采と僅かばかりの物的報酬とを受けて満足するものは多いけれ

ども、一身を燬き盡し、一世を率ゐるに足る高大なる理想と、自己を犠牲にして文明のために戦はんとする献身的精神の横溢した赤誠とを有するものが皆無といつてもよいといふことである。

時は近づいた。——革明家豫言者としての文明批評家の出現すべき時は將に近づいた。出でよ、出でよ。迷べる小羊は皆鶴首し聳耳して雄々しい角笛の音を待つてゐるではないか。

戦後の文明と我が國の使命

「世界の文明が最近一箇の轉向點上に來た」といふ事は屢々いはれることであるが、嚴密にそれは何を意味するであらうか。如何にも、千古未曾有の大戦亂が今や酣に達して、寧ろ幾分終局に近づきつゝあると思はれる點から見れば、そして件の恐るべき大戦亂が近代文明の主潮を形造つた歐洲文明の自殺を弔ふ挽歌であると思はれる點から見れば、何とはなしに、戦争の終局と共に文明の主潮が激變して新文明を生むかのやうに思はれるのは、確かに或る意味に於て至當なことである。併しながら、更に一步を進めて、文明其のものゝ本質と世界文明乃至歐洲文明の現状とを精査する時には、吾々は輕々しく件の斷定に左袒することは出來ない。蓋し、文明の變遷進歩は、勿論或點までは社會狀態社會組織の變遷と併行するものではあるが、而も文明其のものゝ本質的變遷進歩は、人間性其のものゝ變遷進歩と共に、外的影響に左右されないうで寧ろ

外的勢力を左右するやうな、其れ自身の力を源泉とするものだからである。この意味に於て、吾々は戦後に於ける世界の文明、少くとも歐洲の文明には何等か幾分の變化は生ずるけれども、其の基調に於ては左程大なる變化がないと信ずるものである。

詳言するに、吾々を以て見れば、文明は人間性其のものゝ發動の様式であり、そして人間性發動の様式は、大まかには理想的と現實的との二面しかないのである。斯くして、歐洲文明は常にこの二様式の交替參差によつて變遷し發達して來たのである。そして、十九世紀に至つては、この二様式が各其の徹底的境地に達したため、その對峙が最も明白となり、遂には件の何れの一樣式に偏しても文明は破産の悲境に遭遇すべきものであるといふ實證を明示することによつて、新時代即ち最も狭い意味で現代文明を生ずるに至つたのである。随つて、現代文明の基調は、少くとも其の志向に於ては件の二様式の調和統一である。換言すれば、人間性の根柢的全體的要求の満足といふことを中心とするものである。そして其の前時代が所謂現實主義の文明であるために、調和的統一的といひ根柢的全體の自覺といふも、何れかといへば理想主義に

偏するのは極めて當然のことである。この意味に於て、現代は正しく新理想主義の時代である。そして現代は、これまでこの基調を破壊されこの主潮をせき止められる程の根據あるそして力強い大事變には未だ一度も遭遇しないのである。

斯くいにはば、論者は必ずや目今の歐洲大戰を、上の如き吾々の斷定とも、新理想主義とも矛盾すると難ずるかも知れない。併しながら、吾々から見れば、歐洲の大戰は、決して吾々の斷定とも新理想主義とも矛盾するものではなくて、寧ろ却つて、吾々の斷定と新理想主義の價值とを裏書するものである。蓋し歐洲の大戰は、實は現實主義の生んだ弊害だからである。即ち現實主義文明の一面たる科學文明物質文明の生んだ弊害だからである。實に吾々の考へる如き新理想主義の文明が十分に歐洲文明を支配したならば、斯くの如き悲慘な事變の出生を未然に防ぐことが出來たからである。随つて、若しもこの度の大戰が文明の弱點を暴露したものであり、随つてまた斯かる慘劇を再び見ないやうな文明を造らんがためには、結局新理想主義を生ひ立たしめる外に道はないのである。換言すれば、若しも歐洲諸列強が佛國革命後の如く、偏に現實

主義の根柢の上に文明を建設し直さうとする時には、近き將來に於て再びこの度の戦争と同様な、否、一層大きな一層悲惨な大戦亂に遭遇しなくてはならないことは火を賭るよりも明らかな事實である。但し事實としては、歐洲列強がこの度の大戦亂の慘禍に懲りないで、否懲りたがために、この論理を理會しながら、却つて正當な道でないとは知りながら、其の主力乃至は直接の努力を現實主義的文明——科學文明物質文明の發達に盡すであらう。そしてこの努力が盛んになればなる程理想を持ち理會を持つ階級の人達には、件の現實主義的文明の弊害が益々鮮やかになり、強烈に思はれ、随つて所謂新理想主義的思潮が愈々力強くなつて來るに至るのは極めて當然なことである。斯くして歐洲戦後の文明は、暫らくの間かなりに激烈な現實主義と理想主義との對峙交渉闘争を見るに至ることゝ信ずる。併しながら、現實主義を是とするものは、多くはこれを以て理想とするのではなくて寧ろ止むなき一時的手段として、即ち國勢の恢復乃至萬一の場合に備へる準備としてのみ是認するものであつて、一度其の胸奥の衷心要求を探る時には、愛と平和と高い精神生活とをモットーとする美しく新しい新理想主義の文明の建設を庶幾つて居ることを容易く見出すであらう。

思ふに、要求は或る意味に於て最も明白な事實である。随つて、要求として是認される新理想主義の文明は、たとひ暫くの間は動搖不安の状態にあらうとも、やがて現實を最も十分に攝取包容することによつて近き將來に其の充實した果を結ぶであらう否、二十世紀の文明史的意義は、一面的な理想主義と一面的な現實主義とを打つて一丸とした新理想主義の文明を建設することに存するのである。そして現代は、少くとも思想的には既にこの文明史的使命の貫徹に其の第一着歩を入れたのである。然るに、實際に於ては、徹底的に暴露し、根柢まで破産したかと思はれた現實主義的文明の弱點が、實は未だ中途半端な状態に止つて居るに過ぎなかつたのである。そして一度戦亂が起るに及び、現實主義的文明の弱點は其の強所と共に最も鮮やかに暴露されたのである。斯くして新理想主義は、單なる思想的根柢と出發點とを得たばかりでなく更に一層確實な事實的根柢と出發點とを得た結果、一層強い確信と力とを以て直往邁進することが出来るやうになつたのである。斯かる見地から見ると、一見新理想

主義の進路を阻止し其の本質に矛盾するかのやうに思はれるこの度の戦亂は、實は却つて新理想主義に對して確實な根柢と豊富な内容と旺盛な動力とを提供したものでないはなくてはならない。これ吾々が戦後といへども依然として新理想主義が現代文明の基調を形造ると信ずる所以である。

二

然るに、世には、上に述べた如き歐洲文明其のものゝ大變遷といふこと以外の見地から文明の轉向を豫言し豫想するものがある。即ち其れは「東西文明の融合」といふことである。詳言すれば、現代は東洋文明は勿論、西洋文明も亦爛熟の状態に達して、そのまゝまでは進歩發達の見込がないからこの世界の二大文明の長所を打つて一丸として、茲に新文明を創造すべきであると論ずるものである。そして一見すれば、この提唱は如何にも達見のやうである。蓋し世界の文明が西洋と東洋とに截然二分され、そして其等兩種文明の長短が明白に理解されて居るならば、其等の短所を捨て、單に長所のみを以て新文明を組織するといふことは、如何にも合理的の方策のやうに思は

れるからである。

併しながら、文明其のものゝ本質について少しでも思を致す時は、斯かる企は畢竟兒戯に類するものであることが直ちに會得されるであらう。何となれば、文明乃至文明の進歩なるものは、斯くの如く皮相的な外形的な靜的な機械的なものでないからである。換言すれば、文明なるものは、其れを構成し其れを所有する人間の性質即ち民族性或は國民性を離れては存在も進歩も不可能だからである。實に文明なるものは國民或は民族が自己の本性或は根本要求を十分に實現し完成するために、環境と時代とに交渉することによつて成立つものである。この意味に於て、文明は空間化時間化された國民性或は民族性であるといふことが出来る。隨つて文明の本質を十分に理解するには、其の形式たる所謂文明様式を理會するだけに止らないで、其の實質たる國民性乃至民族性及び文化内容の本質をも精到に攷覈しなくてはならない。然るに、上に述べた東西文明の融合論者は、この重大な點を没却し、偏に文明の皮相形式面のみの調和合一に依つて新文明の創造を企てようとする。其の愚や嗤ふべきである。

吾々を以て見れば、東西文明の融合は、要求ではなくて寧ろ事實である。必然避くべからざる世界の大勢である。随つて、東西文明の融合といふことをして意味あらしめんがためにはいふ所の融合の内容が何等か在來乃至現在のものに比してはるかに優秀なものでなくてはならない。そして優秀な内容を有する融合を行はんがためには、勿論上に述べたやうに、東西文明の長所を採り、これを平等に融合するといふやうな機械的な外面的なことによるべきではなくて、寧ろ融合者たるべき國民乃至民族の卓越した、強烈なそして新鮮な生活欲望を中心動力とし、それを時代と環境とに十分適合する如き様式の文明を造らんがために、在來乃至現在の文明の長短を参照してのみ出来ることなのである。この意味に於て試みられる東西文明の融合は、單なる融合のための融合ではなくて、實は文字通に新文明の創造である。そしてこの意味に於ける新文明の創造は、戦争といふやうな社會的大事件によつて其の機會を與へられることにはあるが、決して其の種子を提供されるものではない。蓋し、既に述べたやうに、文明の進歩變遷は國民性乃至民族性の根本要求の進歩變遷であり、随つて、新文明の創

造は、只斯くの如き根本要求其れ自身の分化發達たる新らしい要求の産出の結果としてのみ可能なことであるのに、社會的事變は假令今日の歐洲大戰亂の如き大事件と雖も、單に件の新要求の産出の機會を與へるに過ぎないからである。随つて、眞に強烈な、そして卓越した生活乃至生命の新要求を内に育んで居る國民乃至民族でない限りは、たとひ如何なる社會的大事變に遭遇しても、自己の存在を持續するためにその大事變に適應するやうな消極的繙縫策は講ずることがあつても、新文明を創造するといふやうな積極的進取的根柢的態度に出ることが出来ないのである。

これを事實に徴するに、歐洲交戦國は、多年のそして豫想外に悲惨な戦争の傷害の治療のために、暫くは其の戦後經營に主力を注ぐであらうことは明白な事實である。そしていふ所の戦争の傷害とは、勿論主として外的物質的のもので、文明の中核を形造る高い文化價值其のもの、即ち宗教道德藝術哲學等の方面ではないのである。随つて、政治軍備産業等に於て、各國競つて自國の保持と發達とのために種々の努力を試みるであらうが、其れは大抵眼前急迫の必要に驅られ且其の目標とする所は多くは直

接に或は間接に緊密な利害關係ある(乃至あると豫想される)個々の國家であるから、到底積極的根柢的な態度と悠々迫らざる安らかな心胸とを以て、世界の文運の進歩と人類全體の幸福の増進とに貢獻を與へる如き價值ある新文明を創造するために力を注ぐといふが如きは到底不可能なことである。換言すれば、交戦各列強は、戦後暫らくの間は、戦争を標準として見た自國の缺陷弱點の匡救と、同様に戦争を標準として見た自國の長所強點の助長とに其の主力を注ぐことに依つて、二三列強の文明の皮相にして一面的な融合調和が出来るであらうが、最も十分な意味で東西文明の融合とか新文明の創造とかいふやうな根柢的革新をなし得るやうな境域には容易く到達することが出来ないのである。

三

或は戦争の傷害が案外に迅く癒えて、歐洲列強の國民が積極的態度を取り得るやうな時が間もなく来るかも知れない。即ち、彼等が單に自己の國家文明だけでなく、廣く所謂西洋文明の缺點を痛切に自覺し、其れを匡救せんがために、所謂東洋文明の長

所を加味しようとするに至るかも知れない。——かう思ふ論者もないとは限るまい。併しながら、吾々を以て見ればこれはたしかに謬見である。

如何にも歐洲人の中には、この度の大戦を俟つ迄もなく自己の文明に缺陷のあることを自覺して居るものが少くない。戦争前より頓に旺んになつた彼等の東洋研究熱は勿論其の一部には單なる好奇心から来るもあり、或は低級な利害關係を根源とするものもあるであらうが、其の中心要求は、實に西洋文明の缺陷を東洋文明の長所によつて匡救しようとする點に存するのである。併しながら、斯くしても尙彼等は自己の文明を以て世界文明の主潮本流と信じ、東洋文明は只其の一部の缺陷を匡救するに足るだけの價值しかない副潮流と見做して居るのである。そしてこの信念は、たとひこの度の悲惨な大戦亂を経過しても、即ち西洋文明の大弱點を暴露したもの乃至西洋文明其のもの、破産ともいふべき大戦亂を経過した後に於ても、斷じて彼等の胸臆を去ることはあるまい。随つて、東洋文明の長所を採用する必要の度が益々多くなるに至つても、吾々の考ふるが如き東西文明の融合といふやうな状態に到達しないことは、極

めて明白なそして極めて當然なことである。但し、事實に於て東西兩文明が日を逐うて益々緊密に接近し融合するに至ることはいふまでもない。蓋し、歐洲交戦國は、其の戦傷を癒さんがために、平和的戦争の一大中心點を東洋に定めるに至るはいふ迄もなく、随つて、東洋文明の精華たる我が國と西洋文明を代表する別強との交渉は、あらゆる意味に於て益々緊密となつて來るからである。而かも自尊心強き歐洲列強は、事實に於て東洋文明に學ぶ所がかなり多くとも、其の目的に於て、乃至其のほころに於て、寧ろ我を征服し我を利用し我に教へるといふことにあるから、到底公平に融合調和といふ境域に達することは出來ないのである。

事情は斯くの如くでも、これを理論的に見れば、若しも將來新文明の創造といふことが可能にして必要であるとしたならば、それは依然として東西文明の長所を融合し且それを超越することを外にしてはあり得ないのである。そして又この融合が可能であるとしたならば、その衝に當るものは如何なる國民であらうか。吾々を以て見ればそれは我が國を外にしてはないのである。蓋し、現在の我が國は、第一に、東洋の一國

とはいひ乍ら、支那印度其の他一般東洋諸國とは趣を異にして、其の本來に於ても乃至は其の現在に於ても、東洋文明の共通的特色を具備しながら尙其の上に没すべからざる我が國独自の長所を具へて居るのと、第二に、極めて多年の間あらゆる東洋諸國の長所をとり入れて完全に近い程度迄これを我がものにしたばかりでなく、第三に、極めて短い間に西洋諸文明の長所の一半を兎に角或る程度迄有効に輸入し、且これを我がものとする事が出来る程偉大な受容力包括力同化力を有すると共に、第四に、而かも斯くしても尙自國の長所乃至本質性を消滅破壊することなく、寧ろこれら諸外國の文明より多大の恩恵を受けながら、これに依つても到底満たされない独自の根強い要求を持ち、今や轄然として自己の長所に復り自己の本質性に目覺め、斯くして益々出來るだけ多く諸文明國の長所を利用することによつて自己独自の要求を十分に實現すると共に、要求そのものをも高めるやうな新文明を創造しようとする状態にあるからである。

斯くの如き見地から見ると、東西文明の融合といふことが、單なる皮相的機械

的の折衷調和ではなくて、新文明創造の前提であるならば、その可否は、其の衝に當るべき我が國民性の中に在來乃至現在の如何なる國民の要求とも異つた、そして如何なる國民の要求よりも卓越した独自の且斬新の要求と、其れを十分に事實化し具現して新しい文明たらしめるに足る能力とを持つて居るか否かといふことに依存するものである。

四

翻つて思ふに、苟くも文明といふことに思を致す人である限り、歐洲戦争を思ふ毎に若くは戦後經營を思ふ毎に、必ずや、交戦列國の何れが國家として乃至國家文明として理想に近いものであるかといふことに想到しないものはないであらう。吾々を以て見れば、この度の戦亂の吾々に與ふる最も大きな教訓は實にこの點に存するのである。そしてこの公平な立場から觀察する時には、その國民性の本質に根強く植えつけられた、即ち其の國民性が素直に發現された文明こそ最も望ましい國家文明であるといふことを感じない譯には行かない。換言すれば、形式的にいへば、國家文明は國民性を

根柢とする独自の理想を中心としてのみ價值もあり權威もあるものである。更に別言すれば、國民が喜んで自國の文明と死生を共にすることが出来る程密接な關係が國民性と文明との間にあつてこそ、はじめて國家文明が独自の價值と權威とを有するものである。そしていふ所の國家の理想は、やがて其の國の所有する哲學に最も明白に現れるのである。この意味に於て、哲學を有する國の乃至哲學を中心統率力とする國の文明が國家文明として最も價值ある文明なのである。

併しながら、形式はやがて其の儘に内容實質ではない。即ち、哲學を有する國乃至哲學によつて統率される國の文明が凡て皆優秀な文明であるといふことは出来ない。蓋し、いふ所の哲學には價值の差別があるからである。随つて、國家文明をして眞に價值あらしめるがためには、優秀な哲學を中心とするやうにしないでならぬ。これを事實に徴するに、獨逸の強いのは、いふ迄もなく科學文明物質文明が進歩して居るためであるが、實はこれらの勢力を統一する哲學があるからである。即ちいふ所の「力の哲學」が獨逸の人心と科學力物質力とを統率し支配するからである。而かも獨

逸が戦争に勝ち乍ら、列強の同情を失ふ所以のものは、彼等の所有する哲學の内容が劣悪なものだからである。然らば何故に彼等の所有する哲學が劣悪なものとなつたであらうか。茲が吾々の考ふべき問題である。

世には、獨逸民族乃至獨逸文明を以て偏に科學的物質的のものであるかのやうに思ふものもあるが、これは甚だしい謬見である。如何にも、最近の獨逸文明は餘りに甚だしく科學的物質的の方面に偏して居る。併しながら、獨逸が最近斯くの如くなるに至つた原因乃至經過を考ふる時に、吾々は其處に一箇重大な暗示を得るのである。蓋し、獨逸の文明が近來科學的物質的に傾いたのは、獨逸文明乃至獨逸國民性其のものの本質的自然的發達の結果ではなくて、寧ろ變則的人爲的發達の結果だからである。換言すれば、獨逸が最近この一面に主力を注いだのは、世界の文運の進歩と人類の幸福の増進とに貢獻するやうな、優秀なをとして獨自な獨逸文明を創造し發達せしめようといふ如き積極的なをとして高貴な理想を懷抱した結果ではなくて、實は第一に佛國から受けた打撃を恢復すると共に、第二にその復讐として佛國に與へた打撃の當然な復讐に

備へようとする、消極的な表面的な併しながら切實緊急な必要と理由とを源泉とするものだからである。然るに、佛國は幸か不幸か獨逸に對して獨逸が嘗て自國に對して企てたやうな復讐の舉に出づる實力も意志もなかつたために、多年養つた科學的物質的の勢力が遂に他の緒を見出して發現されることとなつたのである。随つて、獨逸今回の失敗は、本來の獨逸文明其のものゝ必然的失敗破綻ではなくて、實は眼前の必要に應ずるために採用した繙縫策の失敗であり破綻である。換言すれば、獨逸が繙縫的に重大視した科學文明物質文明の過重の失敗であり破綻である。そして、いふ所の科學文明物質文明は、決して獨逸本來の文明ではなくて、實は英佛の少くとも英國の文明の基調を形造るものであることは、吾々の贅言を俟つまでもなく明白なことではないか。この意味に於て、獨逸今回の失敗は、自國文明の本質性に阿つたためではなくて、寧ろ一時的利害のために自己の本質性を忘却し蔑視して、外來のものゝ手段方便を重視した結果であるといはなくてはならない。實に、獨逸文明の本質は、寧ろ理想的浪漫的精神的方面に存することは、燦爛として永久に文明史をかざる十九世紀前半

の所謂「獨逸理想主義」の時代を一瞥することに依つて何人にも直ちに理解されることゝ信ずる。随つて英佛諸國が獨逸今回の失敗を見て、獨逸文明其のものゝ缺陷であると嗤笑するが如きは、實は自ら自己を嗤笑するの愚に近い觀があるといはなくてはならない。

吾々の斯くの如き觀察が、幸にして若しも正しかつたならば、獨逸が將來再び卓越した文明國として立たんがためには、本來の獨逸理想主義の哲學即ち最も高い意味に於ける「力の哲學」を中心とし根柢として、精神味の勝つた文明を建設する外に方途がないのである。これと共に、其の他の列強に於ても、獨逸の失敗は獨逸文明其のものゝ失敗ではなくて實は獨逸が誤り過重した現實主義の文明即ち科學主義物質主義の文明の失敗であることを十分に理會して、獨逸が嘗て取つたやうな誤れる方針によつて戦後の經營をしないやうにすべきである。然るに、若しも彼等にしてこの點を忘却して、偏に物質力科學力に依つて、即ち誤つた「力の哲學」によつて戦後經營を爲す如き短見淺慮に出づる時には、勿論世界文運の進歩に對して何等の貢獻をもなし得ないは

かりか、却つて文明國としての自國の存在の意義を失墜して、今回の獨逸よりもはるかに悲惨な境遇に沈溺するに至るであらう。

五

吾々は、上に述べたやうな理由から、たとひ戦争が終結しても、文明の大潮は容易く大きな變動を來さないことと信ずるものである。随つて、吾々から見れば、輕薄な理想論者が樂觀するやうに、新文明の創造といふ如き破天荒のことは、少くとも歐洲列強の何れの國に依ても成し遂げられぬであらう。只いひ得べくんば、吾々のいふ所の新理想主義が現實主義の奥底に徹することによつて、一層確實な根柢——理論的にも實際的にも——と一層豊富な内容とを得、斯くして、一層力強く且一層複雑多面に進歩して行くであらうと思ふ。随つて吾々は、最も高い意味に於ける歐洲文明其のものゝ變化に就いては特に大なる興味を持つことが出來ないのである。(但し、文明の表面たる政治外交産業等については勿論別である。)

併しながら、翻つてこれを我が國將來の文明に就いて見る時には、吾々ははじめて

甚深な興味を感じるものである。蓋し既に述べたやうに、若しも新文明の創造といふことが可能であるならば、それは只我が國民の手に依つてのみ爲さるべきことだからである。そして、我が國民が新文明を創造せんがためには、既に述べたやうに、在來の如何なる文明によつても満たされない、獨自なそして強烈にして斬新な生活要求と、件の要求を事實化する能力とを持たなくてはならない。随つて吾々は、先づこの點を檢覈することから發足しなくてはならない。

第一に、我が國は、果して在來の文明によつて満たされない獨自なそして強烈斬新な生活要求を持つて居るであらうか。吾々を以て見れば、我が國の現状はたしかに斯くの如き要求の自覺に漸く其の第一步を着けた所である。我が國が歐洲戰爭乃至歐洲列國の文明の長短を批判する上に最も恰適な地位にあり乍ら、そして又熱心にこれを批判しようとしながら、未だ的確に其の長短を批判し得ないのは、實は我が國が自己の最深要求を理會しようとして未だ的確に理會し得ないためである。即ち、自己がわからないから他がわからないのである。この意味に於て、現在の我が國は正しく第二の

自覺の時である。第二のルネッサンスの時である。模倣より創造へ、盲従より獨立へ向ふべき時である。自己の最深要求を最も十分に實現せんがために、獨自の新文明を建設すべき時である。そして又この意味に於て、新文明の創造に對する我が國の要求はかなり痛切であり熱烈である。否、あらゆる意味に於て、我が國は我が國獨自の新文明を創造することなしには、世界の文明乃至人類に對する自己の光榮ある地位と重大なる使命とを貫徹することが出来ないのである。極言すれば、國家を維持することが出来ないのである。

併しながら、要求はそのまゝ直ちに能力ではない。然らば、我が國は果してこの高貴な要求を實現する能力を十分備へて居るであらうか。論者はいふ。我が國民性の長所は模倣力であり受容力であり同化力であつて斷じて創造ではない、と。如何にも、我が國民性在來の長所は、論者の言の如く模倣力受容力乃至同化力であつた。併しながら、過去はそのまゝ將來ではない。否、將來は大部分過去によつて、支配されるものであると共に、我が國民性に少くとも強烈な同化力がある限り、吾々は決して我が國

民性に創造力が缺けて居るといふことは出来ない。蓋し、いふ所の同化力こそ實は消極的狀態に置かれた創造力そのものだからである。實に吾々を以て見れば、我が國民が在來十分な創造的偉大性を發揮することが出来なかつたのは、國民性其のものゝ本質的缺陷ではなくて、實は我が國の地位境遇の然らしめた所である。即ち在來の我が國は、斷えず幾多の先進を有するのために、偏に其の長所を攝取し、恩恵を享受することに主力を注ぐべき地位に置かれたからである。然るに、今や内外の事情が一變して、我が國は全き意味に於て獨立すべき地位に到達した。即ち今日こそ正しく我が國民性に創造力があるか否かと試みらるべき時である。そして吾々はたしかに我が國民には相當な創造力があると信するのである。随つて吾々は、我が國民が新文明創造の要求を充實せしめ、且聰明と熱心とを以て件の要求を事實化することに力を致したならば、必ずや在來のあらゆる文明と異つた新文明が創造されることゝ信ずる。然らば、いふ所の新文明とは何であるか。

六

繰返していふ。國家文明は國民性の本質に依存する。随つて、我が國が新文明を創造するためには、第一に、我が國民性の本質の何であるかを精確に理解しなくてはならない。併しながら、既にいつたやうに、文明は時間的空間的制約を受けるものであるから、第二に、在來の文明の長短を比較研究し、且世界の趨勢を達觀して時代に適した様式を形造るやうにしなくてはならない。そして吾々から見れば、既に述べたやうに、近き將來に於ける世界文明の主潮は依然として新理想主義である。然るに、我が國の國民性乃至國家文明は、これを形式的にいへば著しく調和的である。そして何れかといへば理想的方面に傾いて居る。随つて、現在に於ても亦現實主義の眞實を十分に攝取した理想主義の文明を建設しようとする方向に傾いて居る。一言にすれば、世界の主潮と同様に新理想主義的である。

併しながら、我が國の新理想主義は、歐洲のそのやうな多年に亘る秩序的な變遷進歩の結果として生れて來たものではなくて、實は不秩序な變化の結果である。換言すれば、思想的根柢に比して事實的根柢が著しく薄弱である。随つて、眞に價值ある

新理想主義の文明を建設せんがためには、我が國は少くとも歐洲文明の経過した現實主義的文明の眞實を徹底的に理會し攝取する必要がある。即ち、現實主義の底に徹した結果としての理想主義でなくてはならない。この意味に於て、吾々は何よりも先づ速かに現實主義文明即ち物質的文明科學的文明の長短を的確に理會し其の恩惠を十分に享受するやうにしなくてはならない。そしてこの點から見ても、吾々は論者の漫然たる、皮相な、そして機械的な東西文明の融合といふことを排するものである。要は我が國の缺如する文明の長所を出来るだけ精確に理會し、出来るだけ十分に採用することに即して、自國本來の文明の長所を的確に理會し且十分に助長し、斯くして、これを新らしい最深要求によつて統一してのみ新文明の創造が出来るのである。

そして、抽象的に理想的文明の様式を考へるならば、理想に執するか現實に執するか、更に詳しくは精神を主とするか物質を主とするか、愛に傾くか征服に傾くか、乃至は靜觀に偏するか活動に偏するか、これら數種の外に出でることは出来ないのである。そして我が國將來の文明創造の方針が新理想主義であるとしたならば、上記の中、

その何れを主とすべきかは改めていふを俟つまい。

終りにいふ。與へられた儘に生きることは生を否定することである。文明創造のいとなみも、其れをして價值あらしめんがためには、單なる惰性に一任すべきものでもなく、又單なる在來の事實を根柢とすべきものでもなくて、寧ろ、要求を主動力とし理論を根柢とすべきものである。一言にすれば確實な理想に依るべきものである。そして、既に述べたやうに、國民の理想を最も明白に示すものは廣義の哲學でなくてはならない。然るに、我が國の今日に於ては誇るべき哲學を一つも持つて居ない。この意味に於て吾々は何よりも痛切に新哲學の出現を要望して止まぬものである。我が國民性の本質の何であるか（現實）と何であるべきか（理想）とを、最も明白にそして最も力強く闡明し提唱して呉れる「自覺の哲學」「自覺の哲學者」の出現を要望して止まぬものである。混沌たる國民の新要求に火を點じて新文明のすがたと行方とを彷彿せしめる豫言者の出現を要望して止まぬものである。

戦後の思想界を論ず

一

戦争といふやうな複雑な社會現象は、たとひ如何程小仕掛なものでも、人間の思想に對して何等かの影響を及ぼさずには置かない。殊に、この度の歐洲大戰のやうに、其の範圍が廣く、其の期間が長く、其の場所が世界第一の文明地であり、長時期の平和の後に起つたやうな、更に其れが人力の最善を致した程精巧であり、随つて其の傷害が極度に甚だしいやうな戦争が、人間の思想生活に大きな影響を及ぼさないといふことは、到底豫想することが出来ないのである。斯くして、今や戦争も漸く下火にならうとする時に於て、「戦後の思想界如何」といふことを眞摯に考へる人々が次第に出て來るのは決して偶然ではない。

然るに、等しく戦後の思想界に關して思を致すもの、間にも大凡二つの別がある。即ち、一つは思想界は戦争の終る時に於て根本的大革新を見るとするものであり、他

の一つは、思想界の基調は戦争が終つたからといつて決して目に見えるやうな革新などはしない、單なる部分的の改造變化を見るに過ぎないとするものである。然らば、この二つは果して其の何れが正しいであらうか。私から見れば、戦後の思想界には部分的の變化は起るが、決して根本的革新などは起らない。即ち、其の基調を一變する程の大變化は起らない。以下、この見地から戦後の思想界について管見を述べることにする。

二

改めていふまでもなく、思想は單なる知識ではなくて、生活化され人格化された知識である。人格乃至生活に對する批判力であると共に統率力たることを他にして思想はない。随つて、思想は、人格にとつては單なる所有物ではなくて力であり、附加的のものではなくて醗酵的のものであり、偶然的のものではなくて必然的のものであり、末梢的のものではなくて本質的のものであり、随つてまた、思想の進歩はやがて人格其のもの、生活其のもの、進歩である。

斯くの如く、思想は人格全體生活全體の根柢となり中心となり、随つて人格乃至生活に對して積極的態度を取り、有機的關係を保つものであるから、其の進歩は知識の進歩のやうに迅速なものではない。即ち、新しい知識を攝取することは何人によつてもかなり迅速に出来ることであるが、この知識を全體化——人格化し生活化して本質的なものとするには、相當な時間と相當な精神的過程とを要するものである。蓋し、知識を人格化し生活化するとは、知識を人格乃至生活の核心たり本源たる生活意志——よりよく生きようとする意志に對して全的満足と與へるようになると共に、生活意志其のものを益々深強大にし、更に生活意志満足の意味と價值とを十分に味解することだからである。

随つて、思想の進歩は、單に新しい知識を注入し経験を豊富にしただけで出来るものではなくて、攝取した知識や経験を人格化し生活化してのみ、即ち舊い思想體系中に組み入れてのみ出来ることである。この意味に於て、思想を進歩させるには、斷えず新しいそして優秀な知識や経験を出来るだけ多分に攝取する力が具つてゐると共にこ

の攝取した新要素を思想化する化威力が優れてゐなくてはならない。然るに、この化威力はやがて生活意志乃至生命力であるから、思想を斷えず進歩せしめるには、生活意志乃至生命力其のものを深強大にすることが何より大切である。生活意志が強ければ、分化と統一とを益々緊密にし、破壊と建設とを愈々均衡にして行くから、低級な狭小な淺薄な思想生活に満足することなく、斷えず新しい知識や経験を攝取するやうになるのである。

併しながら、いふ所の生活意志を旺盛にするといふことは、單に冥想沈思しただけで出来るものではない。蓋し、意志は抵抗によつて益々旺んになり、鍛練によつて愈々強くなるものだからである。この意味に於て、思想の進歩は、生活意志を旺盛にすること、生活経験を新らしくすること、の雙關作用の結果である。

斯くの如き見地から見ると、思想の革新は、舊來の思想が人格乃至生活を統率することが出来ないやうになつた時に起るものである。そして、思想が人格乃至生活を統率することが出来なくなるといふことは、思想と人格乃至生活とが乖離するため

である。換言すれば、思想が新しい経験を十分に支配することが出来ないか、若しくは新しい生活意志と調和しないやうになつたためか他にならない。この意味に於て、思想の革新はやがて生活の革新であり、そして思想の根本的革新を要するといふ場合は生涯中滅多にあるものではなくて、大抵は思想の改造進歩で間に合ふものであることは、吾々の経験の明證するところである。

三

個人に於ける眞理はやがて人類に於ける眞理である。個人に於て思想の根本的革新といふことが稀であると同様に、人類に於ても亦思想の根本的革新といふことはそんなに頻繁に起るものではない。即ち、個人的思想の根本的革新といふことに必要な條件と同様な條件がなければ、人類に於ても亦思想の根本的革新が起らないのである。そして、いふ所の根本的革新に必要な條件とは、上に述べたやうに、生活意志の分化と生活経験の變動とである。

然るに、この度の戦争は、表面的に見れば、この二つの條件が完備してゐるやうに思はれるけれども、審に攷覈する時には、必ずしもさうではない。勿論、部分的にはこの両面に亘つてかなりの變化が現はれてゐる。即ち、この度のやうな戦争は永遠に避けたいといふ平和的要求や、弱者を助け、愛の力による四海同胞的生活を営みたいといふ人道的要求や、在來に比して一層精神的に充實した落付きがあり深味のある生活を営みたいといふ精神的要求や、個人の力と團體の力が十分に調和することによつて悲惨な犠牲より免れたいといふ人格的乃至よい意味の民本的要求やが、戦争に伴ふ悲惨な生活経験の變動を味つた結果として、歐洲人否世界全人類の胸奥に湧き出て來た。これと共に、他面に於ては、生活様式にも種々の變動が生じた。露國の革命の如きは其の最も大きなものである。戦争の終結に伴つて更に各交戰國の領土其の上にも少からざる變動を生じ、政治的關係通商貿易交通等にも亦多少の變動を生ずるであらうし、更に、戦争のために蒙つた種々の惨害の結果が明白になるであらうし、随つてそれらの諸條件が、現代人の生活意志生活要求に種々甚深な刺戟を與へる結果として、其處に生活意志の分化を生じ、自ら又少からざる思想の變動を惹起すること

であらうと思ふ。

併しながら、これらの諸條件は決して驚異に價する程斬新な奇抜なものではない。殊に、上に列記した生活意志の分化内容の如きは、一口にいへば「理想主義的要求」である。そしてこれは改めていふまでもなく、二十世紀の文明の基調を形造る所のものであつて、其の萌芽は業に既に相當の形で現はれてゐる。只戦争はこの要求を一層強くし、一層明らかにし、一層細密にし、一層具體的にしたゞけであつて、決して思想の根本的革新を促すに足る程大きなものではない。各種の生活状態の變動は尙更思想の根本的革新を惹起するに足る程の力強いものではない。

以上の見地より、私は、本論の劈頭に記した戦後の思想界に對する第一の見方、即ち思想界は戦争の終る時に於て大革新を見るといふ見解に反對するものである。

四

然らば、戦後の思想界は果して如何に變動するであらうか。一言にすれば、既に述べたやうに、其の基調に於て在來の理想主義的傾向精しくは新理想主義の傾向を繼續

して次第に其れを徹底せしめるだけである。そして、いふ所の新理想主義の徹底とは、舊理想主義のやうな、偏に超越的精神的内面的な抽象觀一面觀を脱して、これと同様の價值ある、少くともこれと雙關的な關係のある現實的物質的外面的の思想の眞實を十分に加味することによつて、人間を根柢的全體的にはたらかすやうな要求をはぐみ、この根柢的全體的要求を十分に力あるものとするやうな内容を充實することである。

斯くして、戦後に於て最も激烈な思想上の變化を受くべきものは、極端に現實的な思想をいだいてゐる國家と、極端に理想的な思想をいだいてゐる國家とである。然るに、極端に理想的な思想をいだいてゐる國家はない。若しありとすればそれはドイツである。即ちドイツは或る意味の理想主義——唯物的理想主義乃至軍國的理想主義とでもいふべき似而非理想主義に誤られてこの度の悲惨な大戦争を惹起したのであるが、今やこの意味の似而非理想主義の不可能を十分理會したことであらうから、將來は必ずドイツ本來の理想主義——精神的理想主義を現代の傾向に恰適するやうなものと

するであらう。これに反して、極端に現実的な國家は勿論支那であるが、恐らく彼の國も近き將來に於てはよい意味の理想主義的要素を加味して、或る程度までは獨立的内容のある思想を生み出すこととなるであらう。

此の他、理想主義的思想と現實主義的思想とが混在しながら、其の間の交渉が不十分なために、二つの思想が調和しないで二元的存在を保つてゐるのはロシアであるが、この國も亦恐らくこの度の革命の結果として、必ず近い中に件の二思想を或る程度まで調和統一して、新時代の基調たる新理想主義的傾向に歩趨を併せることとなるであらう。この他の列強も、自國の民族性及び民族的思想の本性と人文の傾向とに顧みて夫々獨自の思想を生み出すであらうが、其の基調に於て新理想主義であることは疑ひなく。

思想の傾向はやがて文明の傾向である。斯くして、將來の文明は吾々の意味する新理想主義の文明となるのである。即ち、科學萬能物質力萬能の弊風を排して、優秀な文化價値を尊重し優秀な精神的價値を尊重することによつて、人間の全的要求に根柢

的満足と與へるやうな様式と内容とを具へた文明となるのである。この意味に於ける新理想主義の文明は、過程を目的と見るものであるから、極端な理想主義にも極端な現實主義にも偏しないし、全體的根柢的調和的といふことを一大特色とするものであるから、極端な個人主義にも極端な團體主義にも或はまた極端な軍國主義にも極端な平和主義にも偏しないし、更に、目的觀的であるが故に定命論にも自然主義にも墮しな

いと共に、あることに即してあるべきことを見出すが爲めに空味虚靈な浪漫主義にも墮しなく。

斯くの如き意味に於ける新理想主義の文明が、正しく將來の文明である。随つて、世界の各國はこれを標的として各其の國家文明に相當の變化を施さなくてはならない。戦後に於て世界文明の進路が一大轉回を見るといふが如きは、單に荒誕無稽の言であることは私の嘗て別な機會に於て指摘し非難したところであるから、茲には改めていはなく。

五

以上、私は、世界全體を對象として戦後の思想界に關する管見を述べた。然らば、特に我が國のみを對象として見たならばどうであらうか。

改めていふまでもなく、將來を豫見しようとするものは、第一に現實を正視し且正しく理會しなくてはならない。随つて、私も亦戦後の我が思想界に關して價値ある意見を述べようとするには、豫め先づ、我が思想界の現状について觀察しなくてはならない。

我が國現今の思想界の状態について私の劈頭感ずる所は、其れが緊張を缺いてゐることである。そして、緊張を缺いてゐるといふことは、必ずしも内容が空虚淺薄だといふことではないが、少くとも生氣が横溢し將來が有望であるといふことではない。否時としては緊張を缺いてゐることは、常に生氣がなく將來が有望でないといふだけではない。更に其の内容が空虚淺薄なためであることもないではない。そして、我が國の思想界の現状は、遺憾ながら、實に後者の意味に於て弛緩してゐるのである。

斯ういつたならば、恐らく私に反對するものが多いであらう。如何にも我が國の思想界は、表面的に見れば甚だ緊張してゐるやうに思はれる。其の内容に於てもかなり充

實して居れば深味もあるやうにも思はれる。併しながら、更に一步を進めて幾分でも精密に我が思想界の現状を觀察すれば、私の論斷が必ずしも單なる妄言でないことが理解されるであらうと思ふ。

いふまでもなく、緊張は統一を豫想する。統一してゐるか、統一しようとしてゐるか、より大きな統一のためにより小さな統一を破らうとしてゐるかが緊張の條件である。これを言ひ換へれば、自覺及び理想要求が緊張の根本條件である。然るに我が國の思想界には果して何處に統一があるか。果してどれ程明確な自覺があり果してどれ程高大な理想があるか。標的なく中心點なく、更に嚴肅な自覺もなく、徒に興奮し徒に喧擾を極めて底止する所を知らないのが、やがて我が思想界の現状ではないか。勿論、我が思想界には一脈の生氣がある。併しながら、其れは單に暗中摸索から來る生氣であつて、高い理想と明かな自覺とを動力とした本當の「緊張」ではない。我が思想界が何時迄も獨立の境域に達し得ないのは蓋しこれがためである。何時までも見すばらしい模倣阿附の境域に止つてゐるのは蓋しこれがためである。

既に一言したやうに、思想は本來統一を以て其の根本性質とするものである。随つて、思想を持つてゐるといふこと其のことが統一してゐるといふことであり獨立してゐるといふことである。これに反して、統一してゐないといふこと若しくは獨立してゐないといふことは、やがて思想を持つてゐないといふことである。少くとも、優秀な思想を持つてゐないといふことである。この意味に於て、我が國の思想界は低級であり貧弱であるといはなくてはならない。否、事實に於て我が思想界が貧弱であることは、贅言を俟つまでもなく極めて明白なことである。

試みに見よ、思想の中心となるものは哲學思想であるのに、我が國には果して如何なる哲學があるか。これに次いで重要な宗教道德藝術政治教育等の何れのものが、我が國思想界獨特の價值を世界の思想界に對して誇るに足るであらうか。遺憾ながら、吾々は其の餘りに低級であり餘りに貧弱であることを告白しなくてはならない。事實が斯くの如くであるとしても、若しも我が思想界が、自己の低級と貧弱とを十分に自覺して、一日も速やかに其の境域を超越しようといふ要求が充實してゐるならば、其處に一

脈緊張の生氣が動くわけであるが實は其れさへ決して顯著ではないのである。否、寧ろ多くのものは、單に眼前の小利小康に安んじてゐるばかりか、更に甚だしきに至つは、幾分誇衒の惡風をかもししてゐるものさへもあるではないか。眞に獨立した思想内容を具有してゐるならばよいが、謂ふ所の借想文明の悲境にありながら、安心したり誇衒したりするが如きは、只々慨嘆する外はないのである。吾々は、宜しくこの弊風を打破し、國民をして明確な自覺を持たしめなくてはならない。

更に、これを思想の實質に就いて見るに、單に低級なばかりでなく、甚だしく混亂を極め不統一を極めてゐる。而かも其の混亂不統一は、既にいつたやうに、着々として整齊統一に向ひつゝあるものではなくて、單なる文字通の混亂不統一である。即ち、種々雑多な新舊内外の思想が只雜然と混在して、當然しなくてはならない交渉接觸をしないであるための混亂不統一である。これを具體的にいへば、個人思想と國家思想國家思想と人類思想、科學思想と哲學思想、貴族思想と平民思想……等が眞劍な交渉接觸をしないで、只磊々と轉つてゐるのである。そして、これらは一旦眞劍な交渉接

觸を開始しなすれば、何れも困難な大問題であるばかりか、避けることの出来ない大問題なのである。然るに、現今の我が思想界に於て眞剣な交渉接觸を見ないのは、要するに、我が國民が未だ本當に自覺してゐないために外ならない。そして、未だ自覺しないのはやがて未だ價值ある要求理想がないからである。眞に我が思想界の現状本質を自覺し、眞に優秀な思想を要求しなすれば、我が國は到底斯くの如き中途半端な、斯くの如き不徹底な境地に止つてゐられる筈はないである。

六

斯くの如き現状にある我が思想界は、戦後に於て如何に變化して行くであらうか、少くとも如何に變化さして行くべきであらうか。

第一に、この戦争によつて喚起された國家的思想は一段の進歩を見なくてはならない。即ち、極端な軍國主義的要素と過激な排個人的要素とを去つて、眞の人格思想を中心としたものとならなくてはならない。第二に、最近極端に優勢になつた科學思想も幾分調攝されて、廣い意味の哲學思想と調和し、以て我が國獨特の新文明新生活の中心

要素を形造るやうにならなくてはならない。第三に、貴族思想と平民思想とが巧に調和して、眞の立憲思想が醗酵され、眞の國家的生活が産出されるやうにしなければならぬ。そしてこれは、第一項と同様人格思想の發達に俟つことが大きいのはいふまでもない。

これを要するに、戦後の我が思想界は、在來の弛緩し混亂した状態から脱して、緊張した、そして統一あるものとなり、其の内容も單に外來の模倣に止らないで我が國獨特な、而かも外國のものに比して一層優秀なものを創造することによつて、十分な意味に於て獨立したものとしなくてはならない。そしてそれがためには、何より先に「思想の獨立」に對する十分な自覺と要求とを持つことが必要である。「思想の獨立」が「やがて國家の獨立」であり、國民としての「自己の獨立」であるといふことを徹底的に自覺すると共に、この獨立を一刻も速かに事實化しようとする熱烈な要求を懷いてこそ、はじめて我が思想界の將來が意義を持つこととなるのである。

他國の思想界のことは兎に角にも、我が國の思想界の將來を論ずるものは、宜しく

要求本位の見地に立つべきである。「如何に成るか」といふことよりも「如何に爲すべきか」といふことを主眼としなくてはならない。この意味に於て、私は、何よりも先に十分な意味に於ける「思想の獨立」に對する自覺と要求との必要を絶叫せずにはゐられない。蓋し、この自覺と要求だけに十分な境地に達すれば、思想の内容問題などは自ら解決されるものだからである。換言すれば、自覺と要求とは「生みの力」だからである。されば、眞に我が思想界の將來に就いて思を致すものは、この點に注意して、自己の思想乃至思想生活其のものを深めるやうにすることが何より必要である。更に、この意味に於て、私は、自覺と要求とを併せ兼ねたものとしての哲學——我が國家哲學の建設と哲學者の努力とを要望して止まぬものである。

七

最近、我が國に於ても戦後經營乃至戦後教育に關して意見を表白するものは少くないが、其れらの多くは、淺薄皮相なもののみである。そしてそれらが淺薄皮相になるのは、畢竟するに思想的根柢を缺くからである。思想乃至思想界に對する理會と其の

將來に就いての洞察とを缺くからである。

これはひとり我が國の經世家言論家のみの缺點ではなくて、寧ろ教育界全體を通じての病弊である。實に現今の教育者の中には深い思想生活を營んでゐるものが少い。深い思想に對する熱烈な要望を懷いてゐるものが少い。生活乃至人格の價値は或る意味で思想其のものゝ深淺であるかぎり、我が教育者の人格や生活に深みがなく、我が教育界が低級なのは極めて當然なことである。「思想の獨立」の要望のみ徒に喧しくて、其の實の容易にあがらない今日、私は、教育者の自覺を要望して止まないものである。思想乃至思想生活の意義と價値とを正確に理會すると共に、自己の思想を深みのあるものとし、斯くして、我が國家的思想の獨立に對する原動力を涵養することに力を盡す様になることを要望して止まぬものである。

新時代の文明

凡そ要求は力であり理想は進歩の原動力である限り、要求本位の立場、理想主義的見地から観ずれば、生活は、人生は、畢竟よりよくなる——改造の過程を他にしては何等の意味もない。そして「より新らしい」といふことが「よりよい」といふことであるならば、やがて生活は、人生は、断えずより新らしくなる——更新の過程に他ならない。されば、少くとも要求本位の立場若しくは理想主義的見地に立つて人生に對し自己を律する限り、そして其の人が自己最深の要求に聽順し、自己最高の理想に隨從してゐるかぎり、人生は、生活は、断えざる更新進歩の過程でなくてはならない。然り眞の要求本位者、眞の理想主義者にとつては文字通の「舊」は「死」であり「無」である。ペルグソンが、實在を人生を動觀してこれを「時」と見、且これを以て所謂「創造的進化」であるとしたのは、蓋しこの間の消息を明らかにしたものである。

時は創造的進化であり、實在は生命其のものである限り、歴史は——人間の歴史は断じて繰り返すものではない。併しながら、これと共に、時の様相に緩急の別があり生命の状態に緊張弛緩の差がある限り、個人の生活過程に於ても全人類の歴史に於ても、時として急激の變化があることは當然なことである。最近古今未曾有の大戦亂が結末に近づくに従つて、世人をして歴史上の大革命——文明の大轉換が生起するではないかと思はしめるやうになつたのは、この點から見て極めて當然なことである。否これは單なる推論ではなくて、事實に於て、世界の文明は刻々にそして顯著に變化し更新しつゝある。随つて、其の程度性質は兎に角として、近來新文明の曙光がさし初めたといふことに對して、私は何等の疑ひをも容れない。只私は、いふ所の「新文明」なるものが如何なる内容のものであるかといふことに就いては、聊か世人と其の見解を異にする。これ私が本論を草して識者の教を乞はんとする所以である。

二

本論に入るに先だつて、豫め嚴密に攷覈し、正確に決定すべきことがある。それ

はいふ所の「新文明」乃至「文明の將來」に對する見方に就いてある。

第一に、世には時代の變化乃至文明の進歩には確然たる區劃線があるかの如く思つてゐるものが少くない。即ち、たとへば「戦後の文明」といへば文字通りに戦争の結末後に初めて開始されるものゝやうに思つてゐるのがそれである。併しながら、これは勿論大なる謬見である。蓋し、既に一言したやうに、人生そのものは不斷の創造的進化であつて、其の間には寸毫の斷絶も頃刻の間隙もなく、永しへに持續するものだからである。少くとも、今日吾々の論議し要望する「新文明」なるものは、決して戦争終結後はじめて出現するものではない。何となれば、凡そ人生は不斷の創造的進化であるばかりでなく、文明は人間の意志——要求理想を離れては存在し得ないものであり、そして、今日に於ては、所謂「新文明」の現出に對する要求理想は、たとひ漠然ながらも既にかなりに根強く現代人の胸奥に植ゑ付けられてゐるからである。随つて、若しもしふ所の新文明乃至新時代なるものゝ現出が眞に必要なにして可能であるならば、そして「必要」が常に「可能」の最大動力である限り、件の必要の生じた今日を以て、既に

新文明乃至新時代の境域にその第二步を踏み入れたものといはなくてはならない。然るに、多くの世人が新文明新時代といへば、將來の或る一定の時期、たとへば戦争終結後に於て、更に又少くとも或る程度まで完成した形に於て一舉に現出するものであるかの如くに思つてゐるのは、畢竟するに、文明の本質乃至文明進歩の真相を理解し得ないために他ならない。そしてこの謬見は、いふまでもなく、人生の機械觀にその根源を有するものである。然り、理想主義的見地から見ると、新文明はひとりで「現出」するものではなくて、「創造」し、「建設」すべきものである。

第二に、世には、文明の將來を觀するに際し、偏に「如何なるか」といふ純客觀的、理知的、傍觀者的な見方のみに依るものが少くない。これは、姉崎博士の今更らしいとして甚だ不徹底な非難を俟つまでもなく、勿論大なる謬見である。蓋し、上來幾度も反覆力説したやうに、人生は、文明は、人間の要求理想——如何にあらしむべきかといふことを他にしては、存在も進歩も随つてまたその理會も不可能だからである。換言すれば、生は或る意味に於て奇蹟の連續であつて、將來を豫想することは、只自

己の要求理想を根據とすることを他にしては不可能だからである。更に別言すれば、人生特に人生の將來は、理知の對象であるよりも寧ろ情意の對象であり、問題としての人生の鍵は、理知よりも寧ろ情意の所有するものだからである。殊に、今將に開かれつゝある新文明乃至新時代の如く、其の變化の度の激甚なものにあつては、尙更過去の事實理法を以て律することが不可能である。然るに、世には過去を以て直ちに將來を律するが如き謬れる見解を懷抱するものが少くない。そして、この謬見も亦前者同様、人生の機械觀に其の根源を有することはいふまでもない。

併しながら、要求は直ちに現實ではなく、理想は其のまゝで現實ではなく、更に人生は全き自由創造の世界ではなくて、少くとも一部分、否寧ろ見様によつては其の大部分が決定的、惰性的なものであり、随つて、過去に現はれた事實理法によつて少くとも將來の一部分(或は大部分)は豫見し豫想し得るものであるかぎり、文明の將來をトするに際して、全然人間の要求理想のみに依ることは、角を矯めんとして牛を殺す底の極端論であるといはなくてはならない。されば、將來の文明乃至新文明、新時代

に關して眞に徹底した理會を持たんとするものは、上記二つの觀方中の何れにも偏することなく、兩者を併用しなくてはならない。但し、要求本位理想本位の觀方を主體とし中心とすべきことはいふまでもない。要するに、先づ、文明進歩變化の一般的理會を理會し、且これを標準として將來を律することによつて、將來の文明乃至新文明の輪廓と傾向とを大觀することが出来たならば、自己の要求理想を標準として在來乃至現在の文明の病弊弱所を爬羅剔抉し、更に進んで件の病弊弱所を匡救して、自己の最深要求最高理想に十分な満足を興へるやうな文明は抑も如何なるものであるかといふことを具體的に内容的に攷覈することが、將來の文明乃至新文明に關して眞に價値ある見解を樹立し得る所以である。新文明の眞相を理會するものは、單なる歴史家や文明史家ではなくて、寧ろ理想家としての哲學者乃至嚴密な意味に於ける文明批評家の任務であるのは、蓋しこれがために他ならない。

第三に、上に述べたやうに、新文明に關して正確な見解を立てるには、主として自己の要求理想に依るべきものである限り、件の新文明觀の正確性を保たんがために

は、自己の生存する國家の創造すべき新文明を中心とし主眼とすることは、最も聰明にして且最も有効な仕方である。殊に、今日の我が國は、自己一個にとつては勿論、これを廣く世界的人類の立場から見ても、正しく独自のそして優秀な新文明を創造すべき時期に遭遇してゐる點に於て、吾々日本人が、將來の文明乃至新文明に就いて思索し論議する時に、其の中心點主眼點を、特に自國のそれに定めることは極めて合理的であると共にまた極めて必要のことである。そして、自國の文明を改善し、新文明を創造するには、何よりも我が現代國民の最深要求を根柢とし、我が國民性乃至國家文明の長所を基礎とし、これにその時間的空間的條件を參酌し、更に文明進歩の理法と他の文明の長所とを顧慮するやうにしなければならぬ。

然らば、以上の三つの見地から見た私の新文明觀は果して如何なるものであらうか。

三

新文明は、果して何故に創造し建設すべきか。いふまでもなく舊文明に缺陷——破

壊し改造すべき缺陷があるからである。そして、舊文明の缺陷は這回の大戦となり、大战を通して明らかになり、且刻々破壊されつゝある所のものであつて、畢竟するに現實主義、物質主義、主知主義、侵略的國家主義を根柢とし中心とする所に存するのである。換言すれば、理想や精神や人格や平和や愛を蔑視する所に舊文明の缺陷がある。更にこれを他面より見れば、舊文明の缺陷は、その一面的な所に存する。矛盾に富み、不調和に充ち、粗雑に流れ、極端に走つて、人間の全的要求に對して十分な満足——調和的、根柢的な満足を與へない所に存する。殊にこの缺陷が我が國の文明そのものに顯著である。否我が國現今の文明は、單に矛盾不調和粗雑極端であるばかりでなく、更に國家文明としての獨自性を缺き、其の本質的價値が至つて貧少である。この意味に於て、我が國家文明の更改をはかるには、何よりも先に西洋心醉の夢より覺めることによつて其の獨立を獲得し、其の本質的價値を助長するやうにしなければならぬ。そしてこの意味に於て私は國家主義を是認するものである。

いふまでもなく、破壊は直ちに建設ではなく、缺陷の匡救は其のまゝで創造ではな

いから、吾々は更に一步を進めて、「新文明」の積極的方面を明らかにしなくてはならない。

新文明は、少くとも私の要望する新文明は、これを抽象的にいへば、其の形式に於ては「純真」なものであり、其の内容に於ては「充實」したものでなくてはならない。純眞は勿論単一ではなくて統一であり、固定ではなくて醇化であると共に、充實は勿論飽満ではなくて複雑であり、鈍重ではなくて深刻である。別言すれば、複雑な統一醇化であり、深刻な豊當である。

これを詳言するに、第一に、文明が複雑であるが爲には、世界は單なる一共和國ではなくて種々獨立の國家から成立たなくてはならないし、更に單なる精神文明若しくは物質文明といふが如き、乃至は其の他餘りに偏狹な文明に執しないで出来るだけの分化に努めなくてはならない。第二に、文明が統一あり醇化されたものであるが爲には、世界の列強は戦争により、武力により、權謀術數によつて交るべきではなくて、平和に於て、愛と至誠と笑とによつて交るべきであり、其の強弱大小の差異が餘りに

甚だしくはならないし、また其の相互の關係が餘りに親密であつても、疎遠であつてもならないし、更に、各般の文化は破壊變化のみを事としないで鍛鍊、維持、助長、完成に努めなくてはならない。第三に、文明が豊富であるが爲には、所謂物質文明の隆昌に俟たなくてはならないし、第四に、文明が深刻であるが爲には、所謂精神文明の進歩に俟たなくてはならない。そして、在來の所謂東洋文明は統一と深刻とに其の特色を有し、所謂西洋文明は複雑と豊富とに其の長所を有するといふ意味に於て、新文明は、一種の東西文明の融合でなくてはならない。

更に、これを一層具體的な方面から見れば、私は新文明の特色として左の諸點を數へることが出来る。曰く、生活の思想化、曰く、生活の道德化、曰く、生活の人格(民本)化、曰く、生活の人間(人道)化が即ちこれである。

既に一言したやうに、現代文明の一缺陷は矛盾分裂に充ちてゐることである。然るに其の中で最も大きなものは、思想生活と實生活との矛盾分裂である。換言すれば、個人に於ても社會國家に於ても、思想の力の極めて薄弱なことにある。實生活——軍

事は勿論、政治・經濟・産業等に從事するもの、多くは、自己の生活の意味と價值とに對して徹底した自覺——理想と理會とを持つてゐない。随つて、この方面の進歩發達は文明の量的進歩即ち生活を複雑にし豊富にすることは出来るけれども、眞の進歩——生活の統一と深刻化とを促すことが出来ない。否、これらの進歩發達が所謂思想生活乃至精神生活の進歩發達と矛盾し、且これを妨げることによつて、却つて文明の進歩發達を阻害するものである。殊に、この弊害は我が國の今日に於て特に著しく、随つて我が國の新文明を建設するには一層この點を重大視しなくてはならない。實に、我が國民乃至廣く東洋人の思想生活が、某れ自身に於ては西洋人の思想生活よりもはるか卓越したものをも有しながら、全體として文明の進歩に遅れたのは、畢竟するに、それと實生活との間に矛盾があり、若しくは餘りに低級安價な調和統一（知行合一といふが如き）があつたためである。然るに、今や件の調和統一は全然破壊されて矛盾分裂のみとなり、到る所に二重生活、分裂生活の悲惨を見ることとなつた。されば將來に於ては、何處までも思想——卓越した思想を以て生活の中心骨子とし、十分に全體と

しての生活を統率——思想化するやうにしてのみ、始めて價值ある新文明を創造することが出来るのである。

併し乍ら、思想乃至思想生活には種々の内容上の區別がある。哲學、宗教、道德、藝術、科學等が即ちこれである。然らば、いふ所の生活の思想化とは、これらの何れを主として生活に對することであらうか。私から見れば、生活の道德化こそはやがて新文明の一特色とするに値する生活の思想化である。蓋し、生活が思想化された状態——思想生活と實生活とが調和統一し、自覺的に云爲行動する状態が、やがて嚴密にいふ道德生活であると共に、舊文明の一大缺陷は、この意味の道德の力の薄弱なところ存するからである。

勿論、在來とても、道德の價值や權威が全く蔑視されてもゐなければ其の力が皆無でもないが、只いふ所の道德なるものが極めて月竝な意味に於て使用され、極めて低級なものと解され、且極めて狭い範圍に限られてゐたのである。即ち、道德は生活の中心ではなくてその一部であり、且其の價值は萬人から認められたのではなくて只一

部人士の間に限られ、而かもそれは大抵生活の一方便としてのみ見られたのである。強者長者が道徳を蔑視し蹂躪して、弱者幼者が永しへに虐げられたり、或は國際間に道徳が無かつたりしたのは蓋しこれがためである。そしてこれは、畢竟するに人格觀念の發達普及が不十分なことから生じた病弊である。蓋し、道徳の道徳たる所以は、人格の價値と尊嚴とを認め且これを愛護するところに存するからである。されば、將來に於ていふ所の生活の道徳化をして十分ならしめんがためには、何よりも人格觀念の發達と普及とを計らなくてはならない。これ私が新文明の一特色として生活の人格化を數へた所以に他ならない。

改めていふまでもなく、人格觀念は自我尊重の觀念であると共に、他我尊重の觀念である。換言すれば、獨立自由の觀念であると共に平等相愛の觀念である。されば、この觀念を重大視する文明に於ては、個人及び團體の獨立自由が十分に獲得され保護されると共に、個人及び團體間の相互扶助、平和協同も亦容易く成立するのである。實に、新文明の理想とする所は、文字通の「奴隸」といふものが只の一人も無い社會であ

る。勿論自由獨立は放縱孤立を意味するものでないから、新時代の人々は在來に比して一層重大な責任と義務とを擔はなくてはならない。即ち、家族や國家の一員としては勿論、それ以外に、世界の一員、全人類の一員としての責任と義務とを荷ひ、全世界の進歩と全人類の幸福との増進のために、積極的な貢獻をしなくてはならない。斯くして、國際道徳の價値は保たれて世界の平和は維持されるばかりでなく、更に強者長者の弱者幼者に對する道徳——私の所謂主道、親道、夫道も容易く且十分に實現されるやうになるのである。

然り、新時代に於ては、人間各自の自由獨立が益々確實に獲得され保證されると共に、人間各自が相互に扶助し協力する餘地が益々増加されるやうにならなくてはならない。換言すれば、各個人が自己の力でよりよくする自治の度が益々高まると共に、自己より劣弱者、及び家族、社會、國家、人類といふ様な團體をよりよくする爲の努力が益々加はるやうにならなくてはならない。斯くして、個人主義と團體主義とが巧に調和して眞の人道主義の時代となるのである。随つて、生活の人格化はやがて生活

の民本化及び人道化を意味するものである。然るに、世には民本主義といふことを以て偏に生活の數量化、凡俗化を意味するもののやうに考へてゐるものが少くないが、これは斷じて謬見である。然り、徹底した人格觀念を根柢としない民本主義は、單に個人を、國家を、文明を破壊するのみである。この點から見て私は、人格觀念を根柢としない似而非民本主義の流行を排すると共に、眞の民本主義は、單なる數量主義ではなくて寧ろ一種の精神上的貴族主義であるとし、更にこれを單なる政治上の原理であるばかりでなく、家庭生活、社會生活の原理とすべきものとするものである。

生活の思想化といひ、道德化といひ、人格化といふ。一見すれば、私の要望する新文明は如何にも窮窟であり嚴肅であり索漠であるかの様であるが、必ずしもさうではない。蓋し、要は生活をもつと深みがあり、もつと濕ひがあり、もつと味ひがあり、もつと光のあるものとするのが私の本旨だからである。換言すれば、生活を十分な意味で「人間化」し「人道化」しようとするのが、私の本旨だからである。この意味に於て、新文明は一般に藝術を一層重大視するものでなくてはならない。殊に、我國に於て

は特にさうである。蓋し、今日の我國の文明は甚しく散文化して、膚淺となり、粗雑となり、輕薄となり、索漠となり、灰色となり、更に矛盾混亂してゐるからである。

この點に關して私の最も不満に思ふのは、現代の文明は、勞役と生活の趣味乃至幸福とが甚だしく分離してゐるといふことである。新文明は宜しくこの缺點を匡救して、勞役と趣味乃至幸福とを調和するやうにしなければならぬ。そしてそれがためには、何よりも生活のヒューマニゼーションといふことに努めなくてはならない。斯くして、新時代に於ては、藝術乃至藝術家の職能が益々重きを加へることとなり、随つて、文藝も文藝家も其の質を高めなくてはならないこととなるのである。更に又この意味に於て、新時代に於ては、文藝と道德及び教育との調和が一層完全にならなくてはならない。

尙、この點に關聯して特に現今我が國に必要な他の一事は、勞役の價值を重視するやうな風習を作ると共に、富の分配を公平にすることである。蓋し、國家の盛衰及び價値の高下は、偏に中産階級に依存するものであり、そして件の中産階級は、最も高い

意味に於ける勞役に依つて生活を維持すべきものであるにも係らず、我が國今日の中産階級には、一面に於て勞役を厭離するものが次第に増加しつつあると共に、他面に於て勞役に伴ふ相當の報酬が得られない爲に不健全な思想を懷き、不健全な生活を營むものが益々増加するやうになり、斯くして所謂中産階級の墮落に次いで滅亡を來し、延いては國家の隆昌を危くしないとも限らないやうな状態になるからである。將來の新文明は、この缺陷を十分に匡救するものでなくてはならない。そしてそれがためには、勿論勞役尊重の良風を馴致すると共に、單に貧富のみによつて人間乃至生活の價値を評價する如き惡風、及び華族世襲制度若しくは富豪の子弟の座食の弊習を打破するやうにしなくてはならない。否それよりも先づ、社會の全階級の中、特に中流階級をあらゆる意味に於て——就中道德的な意味に於て——最も健全なものとしなくてはならない。

四

以上要するに、私の要望する新時代の文明は、吾々現代人の最深要求に對して全的

満足を與ふる如きものである。随つて、其れは或る意味に於て調和的のものでなくてはならない。但し、いふ所の調和は勿論數量的、皮相的の妥協ではなくて、どこまでも自己の本質性即ち自己の要求理想を中心動力とする眞の調和——根本的調和である。詳しくは、これを時間的立場から見れば現實的理想主義——新理想主義の文明であり、これを空間的立場から見れば個體的普遍主義——人格主義乃至人道的國家主義の文明であり、これを本質的立場から見れば物質的精神主義——新唯心主義の文明である。

新時代の文明が現實的理想主義の文明であるといふことは、斷えざる創造進化を精隨とするといふことであり、過程を目的と見るといふことであるから、極端な理想主義にも極端な現實主義にも、或は又極端な目的觀にも極端な定命觀にも偏しないし、それが、個體的普遍主義の文明であるといふことは、人道主義的乃至文化主義的國家を以て最善の文明様式とするといふことであり、よい意味の民本主義を根柢とする一種の家庭制度、代議政治を以て最善の國家生活の様式とするといふことであるから、

極端な個人主義にも極端な團體主義にも、或は又極端な軍國主義にも極端な平和主義にも、極端な専制主義にも極端な民主主義にも偏しないし、更に、それが物質的精神主義の文明であるといふことは、物質生活を通じて精神生活を實現し、實生活と思想生活との調和——生活の思想化を主眼とするといふことであるから、科學萬能、物質力萬能の弊を排して優秀な文化價値・精神的價値を尊重することである。

然らば、斯くの如き新文明は抑も如何にして創造し建設されるであらうか。いふまでもなく、それは新時代を構成する個人個人の自覺と奮起とに俟つ外はない。各個人が高大な理想を懷抱すると共に、出来るだけ十分にこの理想を實現することを他にして途はないのである。そして、萬人に向つて眞に價値ある理想を樹立するものは廣義の哲學であり、萬人をしてこの理想を理會せしめると共にこれを實現する能力を得しめるものは廣義の教育である。この意味に於て、國家が独自の文明を創造し建設せんがためには、何よりも優秀な國家哲學と完全な國民教育とに俟たなくてはならない。斯くして、將來の國家的競争は、畢竟するに哲學と教育との競争となるのである。され

ば哲學を以て閑人の閑事業視したり、教育を以て單に文部省や教師や少年少女のみの關心事と見たりするものには、到底文明の將來が理會されないと同様に、この二つを輕視する國家は結局衰滅の悲境に沈湎しなくてはならないのである。借問す。我が國には果して上記の弊害が皆無であるといふことが出来るかどうか。但し、私の眞意は、哲學と教育とが優秀でありさへすれば、政治や、軍事や、産業や、科學や、藝術や、道徳や其の他一切の文化内容が、如何なる状態にあつても、立派な文明を創造し建設することが出来るといふことにあるのではなくて、寧ろ只哲學と教育とを以て新文明創造の基礎であり、中心動力であるとするに過ぎないといふことは、多言を俟つまでもなく、聰明な讀者諸君の直ちに理會するところであらう。

外來思想と國民生活

—

我が國は、今やあらゆる意味に於て、革新の時期である。單に、生活乃至文化の方面に互つて革新が必要であるばかりでなく、更に、根本的徹底的革新が必要な時である。そして、いふ所の根本的徹底的革新とは、國民が在來の模倣的無自覺的態度を捨て、借想文明の境地を脱して、獨特の國民生活を營み、獨特の國家文明を建設することに他ならない。然らば、生活の革新をして斯の如き根本的徹底的なものとするには、果して如何にすればよいであらうか。一言にすれば、革新に思想的根柢を附與するといふことを他にして方途はないのである。蓋し、私から見れば、思想は個人に於ても國家乃至人類に於ても、生活の中心動力だからである。この意味に於て、私は、「生活の思想化」といふことを以て、我が國民生活改造の主眼點とすると共に、「思想の獨立」といふことを以て、新文明創造の第一着歩とするものであり、随つて又、「思

想問題の研究」を以て焦眉の戦後經營策とするものである。但し、私が思想乃至思想問題といふことを、斯くの如く重大視するのは、單に、上の如き理論的根據のみからのことではなくて、更に、一層切實な理由を有するものである。然らば、いふ所の一層切實な理由とは何であるか。一言にすれば、我が國民乃至國家の不健全な状態である。

私から見れば、今日に於ける我が國民生活は甚だ不健全な状態にある。就中その一大缺點は生活に思想的根柢——堅實にして深遠な思想的根柢がないといふことである。否、これはひとり今日の我が國ばかりでなく、寧ろ多年に亘れる事實である。國家文明の獨立に於て、其の第一着歩となり其の中心根柢となるべき「思想の獨立」が、在來は勿論、其の必要と價值とが識者によつて反覆力説されつゝある今日に於てすら容易く實現されないのは、畢竟するに、我が國民が、思想の價值を十分に理會せず、随つてこれを以て生活の中心とし根柢とする能力を缺いてゐるがために他ならない。そして、この缺陷が匡救されない限り、我が國民生活は、永しへに根本的革新を見ること

が出来ず、我が國家文明は永しへに獨立することが出来ないのである。而かも我が國家にして、若しも今日に於て根本的徹底的革新を遂行しない時には、やがて衰滅の外はないのである。然るに、我が國民の現状を見るに、この重大な點に關して徹底した自覺を有するものは至つて少い。就中、私の最も遺憾とするところは、廣義の政治家にこの重大な自覺を持つてゐるものが極めて尠いといふことである。彼等がこの國家の難關に面接しながら、醜い黨同伐異を事としたり、さもなければ、徒に皮相的末梢的政策に精魂を傾けてゐるのは所以あることではないか。そして、この點から見る時には、私が、今日思想乃至思想問題を特に重大視し、且生活の革新に思想的根柢を附與せよと絶叫することは、必ずしも不當な見解ではあるまい。

然らば、如何にすれば、生活の革新に思想的根柢を附與することが出来るであらうか。いふまでもなく、生活の革新を目的とする各種の問題を先づ思想問題として、乃至は、思想問題と聯關さして見るのが唯一の方途である。換言すれば、凡ての問題を皮相的部分的にのみ見ないで、一方に於ては、問題を自己の内面生活・精神生活・乃至

中心要求に結びつけることによつてその皮相のみを見ることを避けると共に、單に空理空論的解決に走ることを避け、他方に於ては、問題を人生の目的・眞義に照することによつて、その一面のみを見ることより免れると共に、偏に個的實際的解決に墮することより免れ、斯くして眞に觸れた、眞に徹底した、眞に完全な根本的解決を下すやうにすることが最良の手段である。更に別言すれば、各種の問題を、單に個々別々な「事實」として純粹に客觀的に見ないで、相互に關係のある、全體としての人生の一部分、即ち「價值」として見、且これを主觀的及び客觀的に——自覺的にそして批評的に、實際的にそして理論的に、即ち自己の要求及び人生の理想目的に照して取扱ふのが生活の革新に思想的根柢を附與する所以である。但し、この點を十分に明らかにするには、少くとも「思想」其のものの意義、及び、思想と生活との關係を闡明しなくてはならないが茲には誌面の都合上これだけに止めて置くこととする。

二

生活の革新をして根本的徹底的ならしめるには、其れに思想的根柢を附與しなくて

はならないといふことは、やがて、生活の改造をはかるには思想の獨立を以て其の發足點とし、根柢としなくてはならないといふことである。殊に、今日の我が國のやうに、「生活の改造」といふことは、實は「文明の獨立」といふことを意味する所に於ては、「思想の獨立」を以て生活改造の發足點とし根柢とすることは、一層必要にして且當然なことである。蓋し、既に一言したやうに、凡そ思想は、生活の中心動力であるばかりでなく、更に、事實に於て、我が國が、これまで何時までも獨特の價值ある國家文明を建設することが出来なかつたのは、國民の思想乃至思想生活が模倣的であつたからである。

然らば、如何にすればいふ所の「思想の獨立」をはかることが出来るであらうか。世には、外來思想の排撃を以て、國民思想の獨立をはかる最上策とするものが少くない。實際、現今の我が國に於ても、この種の見解を懷抱してゐるものがかなり多い。極端な國粹論者や、國家主義者や、民族主義者は其の代表的なものである。併しながら、この見解は、「孤立」を以て直ちに「獨立」と見るもので、斷じて謬見である。

勿論、「獨立」といふことには、或る意味に於て「孤立」といふ要素が包含されてゐるものと見ることが出来る。蓋し、獨立といふことは、他の勢力の支配を免れて「自ら立つ」といふことだからである。而かも、謂ふ所の「自ら立つ」といふことが、單に文字通りに他の勢力の支配を免れるといふだけの意味のものならば、それは未だ十分な意味の「獨立」ではないのである。何となれば、眞の「獨立」とは、他の勢力の支配を免れると共に、必ず何等かの意味で、他に、積極的に働きかけることを得ることであり、そして、他に積極的に働きかけるには、必ず其自身獨特の價值即ち獨自の理想と理想の實現力とを具へてゐなくてはならないからである。換言すれば、「孤立」乃至「自立」は、十分な意味に於ける「獨立」の一面——消極的・形式的・第二義的一面であつて、其の積極的・實質的・第一義的方面は、他の如何なるものとも異つた、そして他の如何なるものよりも優れた、隨つて、他に對しては積極的に働きかけて良好な影響を與へると共に、他の所有する長所を自由に攝取し同化して、自己の優れた點を斷えずよりよくすることの出来る本質的卓越性でなくてはならないからである。されば、

我が國民が思想の獨立をはからうとするには、單に外來思想の排撃のみを以て足れりとする事は出來ない。

勿論、我が國固有の國民思想が、上に述べたやうな意味で、眞に獨立するに足る本質的價値を具有するものであるか、但しは、謂ふ所の外來思想なるものが、偏見者又は似而非國粹論者の考へるやうに、凡て有害危険なものであるか、又は凡て無價値少價値なものであるならば、これを排撃することは、たしかに至當な方策であるけれども、事實は甚だしくこれと趣を異にしてゐる。即ち、我が國固有の思想が、未だ眞に獨立するだけの價値を具有してゐなければこそ、やがて「思想の獨立」といふことが問題になるのであると共に、いふ所の外來思想なるものにも、或は、我が國民生活をよりよくする上に、乃至は、我が國民思想を眞に獨立さす上に、必要缺くべからざるものも少くないかも知れないし、或は又一見外來思想と思はれながら、實は、我が國にも本來形を代へて、若しくは可能性として存在するものもないとも限らないのである。されば、眞に國民思想の獨立をはからうとするものは、偏狹な排外的態度又は

幼稚な獨尊的態度を取ることなく、何處迄も、謙抑な、博大な、そして聰明な心事を以て、即ち、十分な意味に於ける批評的態度を以て、謂ふ所の外來思想に對し、そして、正確に批判すると共に巧に其の長を採り短を捨てるやうにしなくてはならない。然り、斯かる批評的態度を以て外來思想に對してこそ、はじめて眞に國民思想の獨立をはかることも出來れば、國民生活の改造をはかることも出來るのである。

以上の見地から見ると、國民思想の獨立及び國民生活の改造の上に、差し當つて必要なことは、いふ所の外來思想の真相眞價を嚴密に攷覈し正確に批判することである。換言すれば、外來思想の眞偽——本當に外來的のものであるか但しは外來的のものやうに見えながら我が國にも本來存在するものであるか——と、其の價値——外來的のものとしての其れ自身の價値及び我が國民思想乃至國民生活に對する功過——とを闡明することである。蓋し、斯くしてのみ、吾々は、はじめてこれに對する最も適切な方案、即ち排撃するか同化利用するかといふ方案を講ずることが出來るからである。

然るに、若しこれに反して、上に述べたやうな没批判的な態度を取る時には、「角を矯めんとして牛を殺す」が如き、或は、「盗人を捕へて見れば我が子」であるが如き愚を敢てしないとも限らない。否、斯くの如き愚を敢てするものが、遺憾ながら、現今の我が國には決して少くないのである。就中、私の最も痛恨に堪へないのは、身爲政の重職にあるものの中で、名を「國民思想の統一」に藉りて、偏に外來思想の排撃と壓迫とに力めてゐるものがあるといふことである。私は彼等の國家と思ふ心事を諒とするが、而かも彼等の不聰明を看過することは出来ない。吾々は、宜しくこれらの没分曉漢と戦つて、眞に健全な國民思想の統一と發達とを期しなくてはならない。凡そ眞の統一は、只内よりの力で出來上るものであつて、外よりの壓迫によつては斷じて出來るものではない。況んや、思想は自由を生命とするものであるに於てをや。されば、偏に目前の紛糾のみを慮れて、彌縫と糊塗とを試みるが如きものは、思想の革新にたづさはる資格はない。然り、思想の革新こそは、あらゆる革新中最も困難な最も價値あるものであることを眞に會得した人にしてのみ、はじめて思想問題に容喙

する權利があることを忘れてはならない。この意味に於て私は、最近我が思想界が甚だしく混亂しつゝあることを悲しまない。寧ろ私は、只上に述べたやうな没分曉漢の不當な干渉に依つて、不自然な統一や不徹底な解決を餘儀なくされることを、我が國のために最も遺憾に思ふものである。希くば、我が思想界に自由と生氣とを與へよ。そして眞の統一と解決と、隨つて眞の獨立とを得しめよ。

はしなくも私は激越の筆致を弄した。私は、論議の本道に立ち戻らなくてはならない。そして、論議の順序として、第一に先づ、目今の思想界に於て外來思想と見做されるものには如何なる種類のものがあるかを檢覈しなくてはならない。

今日の我が思想界を一瞥するに、外來思想と目すべきものはかなり澤山あるが、就中、特に代表的なものとして重大視すべきものは、科學的思想、物質的・經濟的・功利的思想、個人主義的思想、人道主義的思想、軍國主義的思想、立憲的・公民的思想、人格的・民主主義的思想等である。勿論、これら諸多の思想は、種々聯關し共通するところがある。たとへば、科學的思想と物質的・經濟的・功利的思想との如きは、其の

根柢が一つであることを見ることが出来るし、人道主義的思想以下の諸思想も、表面的には一見全く矛盾するかの如くに思はれるものもありながら——たとへば人道主義的思想と軍國主義的思想との如き——而かも精密に比較する時には、何れも脈絡貫通する一系の思想であることを見出すことが出来るのである。

さて、これらの諸思想は、大體に於いて外來思想と見ることが出来る。そして、これらの思想が外國から我が國に輸入されたのは、必ず何等かの點で、我が國民が歓迎した結果であることはいふまでもないから、其れが極端に流れない限り、即ち、これを有効に活用する限り、何れも皆我が國民生活にとつて何等かの價値を有するものである。殊に、科學的思想、人格的思想、乃至は立憲的・公民的思想の如きは、我が國民生活の改造——充實と向上との上に極めて大切なものであり、そして何等の危險をも伴はないものであるから、これらは、何處までも尊重し歓迎し助長しなくてはならない。併しながら、個人主義的思想、人道主義的思想、民本主義的思想、乃至は、物質的・經濟的・功利的思想の如きは、其自身には何れも多大の長所を具備してゐるにも

係らず、其れの利用法を誤つて極端に走る時には、國民生活を害するに至ることは、極めて明らかなことであるから、輕々しく歓迎することは出来ない。随つて、私も茲で、これらの思想の長短を嚴正明確に區別し、且詳細に各方面から適用上の注意を述べたいし、又述べべきであるが、到底其の餘白を持たないから、茲には、只、便宜上以上の危險性を有する諸多の外來思想中、特に民本主義的思想の價値と其れの適用法とを、特に國民道德の方面より論究することによつて、私の其の他の外來思想に對する態度の輪廓を明らかにし、餘は聰明な江湖の推斷に一任することとする。

三

本論に入るに先立つて、私には、豫め説明を要することがあるやうに思はれる。それは、いふまでもなく、「何故に、私が、數ある外來思想中、特に民本主義的思想のみを選んだか。何故に、私はまた、數ある見方の中、特に國民道德の方面からのみ見ようとするか。」といふことである。

先づ第一の點から説明するに、私が特に民本主義的思想を選んだのは、私から見れ

ば、この思想は、所謂外來思想中最も新しいものであり、随つて、我が思想界當面の活問題であるばかりか、我が國民生活から見れば、長短共にかなりに顯著で、取扱方の如何によつては、藥にも毒にもなる恐ろしい要素を含んでゐるし、更に、外來思想として幾分不純なもの、即ち我が國民思想中にも包含されてあるかの如くにも思はれるがためである。次に、私が、何故に特にこれを國民道德の方面からのみ見ようとするかといふ第二の點に就いて見るに、畢竟私は、國民道德を以て國民生活の基礎であると共に、其れの中心要素であるとし、随つて、この一點から民本主義的思想を批判することは、やがて、國民生活全體からこれを批判することと同一であると信ずるが故に他ならない。以下、この見地から批判の歩を進めることとする。

さて、改めていふまでもなく、凡そ何ごとでも、或る對象の價値を批判するに際して第一に必要な手段は、對象の真相を明らかにする——意義を限定するといふことである。然るに、世人の論議を閲するに、ひとり民本主義的思想乃至民本主義に關してばかりでなく、其の他の問題に關しても、多くはこの極めて大切な第一手段を經過し

ないで論議するものが多く、随つて、水掛論が多いのは甚だ遺憾なことである。そして、これは、新らしく輸入した思想問題に特に多い。當面の問題たる民本主義も亦其の例に漏れない。随つて私は、本論に於ては、何よりも先にこの思想に關する私の理解を明白に表白して置かなくてはならない。

第一に、私は民本主義と民本主義的思想とを區別し、且前者から見ると、民本主義には、少くとも廣狹二つの異義がある。廣義の民本主義とは、略ぼ民本主義的思想と同様の意味であつて、廣い意味で生活上の主義精神を指すものであり、狹義の民本主義とは特に政治上に適用された主義である。

更に詳言すれば、廣義の民本主義は、生活上の貴族主義に反對するものであつて、寧ろ社會の下級者或は幼者弱者を上級者長者と同等以上に重大視する思想で、これにも貴族乃至長者強者から出るものと、下級者乃至幼者弱者から出るものとの別がある。而かも兩者は、共に人格尊重の念を骨子とし、凡そ人たるものは、たとひ如何なる地位境遇にあつても、「人格」としてはすべて平等であり、随つて、長者強者は幼

者弱者の「人格」を敬愛し、幼者弱者も亦「人格」としての自己の価値と權威とを維持し發揮すべきものであるとする思想である。

但し、兩者は斯くの如く、其の根本思想を同じくしながら、其の發動した上から見れば、甚だしく其の様式及び色調を異にする。即ち前者は、人格尊重の念を骨子としながら、單に冷やかに理論的に人格思想に左右されるばかりでなく、更に温い愛情乃至人道的精神と、強い責任觀念とを伴ひ、萬人と共に人生の幸福を別たうとするものであり、随つて、人道的人格主義若しくは普遍的人格主義とでも稱すべきものである。これに對して、後者は、偏に理論的な人格思想を根據とするものであり、且其の着眼點は、幼者弱者としての自己及び自己と同等者のみの幸福の獲得と權利の主張とに限られてゐるものであり、随つて、個人的人格主義若しくは特殊的人格主義とでも稱すべきものである。

次に、狭義の民本主義、即ち政治上の民本主義は、要するに國民を以て國家の原動力乃至主要素と見るもので所謂貴族政治に反對する思想であるが、これにも亦極端なものとの穩健なものとの別がある。即ち一つは、國家の主權の位置から見ると、一つは、國家の目的及び政治の運用の方針から見るとである。更に詳言すれば、前者は、國家の主權は民にあると見るもので、寧ろこれは民主主義と呼ぶべきものであり、後者は、政治の目的も運用も民を本位とすべしと見るものである。

更に、これに對して一層詳しい區分を施すならば、極端な民本主義即ち民主主義は、絶對的民主主義と相對的民主主義とすることが出来る。絶對的民主主義とは、形式内容共に徹頭徹尾民を國家の主體とするもので、彼の文字通りの共和國を理想としたり甚しきは無政府主義を夢みたりとする思想であるし、相對的民主主義とは其の形式はたとひ君主國であつてもよいが、只國家の主權が君主にあるものとは見ないで、民にあるものとする思想である。穩健な民本主義も亦二つに別れて、政治終局の目的は一般國民の利福にありとするものと、政治運用の方針は一般國民の要求意向に隨ふべしとするものである。

斯くの如き意味に於ける政治上の民本主義を、更に、一般的民本主義に對して加へ

た區分法に従つて別つ時は、國家の上位者或は政治の局に立つものから出た民本主義と、國家の下位者或は民衆から出た民本主義との二つになるが、この間の相違は、既に略述したところから見て明らかなきことと信ずるから、改めて詳述しないこととする。

四

以上、私は、所謂民本主義及び民本主義的思想に關する私の理會を披瀝し、且必要と信ずるだけの分類を施すことによつて、其の一般的意義を明らかにした。然らば、斯くの如き意義と種類とを有する民本主義乃至民本主義的思想なるものは、果して我が國にとつて全く外來的のものであらうか。そして、若しもそれが眞に外來的のものでありとしたならば、吾々は、これに對して如何なる態度を取り、如何なる方法を講ずればよいであらうか。

便宜上、先づ狹義の民本主義即ち政治上の民本主義より檢覈することとする。第一に、極端な民本主義即ち私の所謂民主主義について見るに、絶對的民主主義は勿論我

が國にとつては全く外來的のものであるばかりでなく、更に全然排斥し、極力防止すべきものである。蓋し、これは、我が國體に反し、我が國民性に反し、隨つて我が國民生活を破壊するものだからである。改めていふまでもなく、我が國體の精華は、萬世一系の皇室を奉戴し、且君臣一體・忠孝一致の美風を有する所にある。然るにこの意味の民主主義は皇室の尊嚴を認めないのみか、其の存在をすら認めないものであるから、斷じて排斥しなくてはならない。これに反して、相對的民主主義の如きは皇室の存在を肯認する餘地を有してゐる點に於て、前者程極端ではないが、而かも、これを單なる機關視する點に於て、我が國體乃至國民思想と背反する。隨つて、この意味の民本主義乃至民本主義的思想も亦前者同様我が國民生活を破壊し我が國家を危くするものである。隨つてこれ亦全然排斥し、極力防止しなくてはならない。

第二に、これを穩健な民本主義に就いて見るに、これは、一見外來的のものやうに思はれるが、決してさうではない。少くとも、政治終局の目的は一般國民の利益幸福にありとする思想は、明らかに古來我が國に存在するところである。勿論、多數の

政治家の中には民の利福を意としないものもあつたが、我が皇室に於ては、歴代の皇帝が民の利福を念とし給へることは、歴史の明證するところである。併しながら、政治の運用の方針は國民の要求意向に従ふといふ意味の民本主義は、我が國に於ては十分に發達しないで、寧ろ「民は由らしむべく知らしむべからず」といふ反民本主義的思想が多年我が國の爲政家の頭を支配してゐたが、歴皇の中には、この意味の民本主義的思想に依つて民に臨ませられた方が少くなかつたことは、明治天皇の「五ヶ條の御誓文」其の他によつて拜察することが出来る。随つて、この意味の民本主義も亦全然外來的のものであるといふことが出来ないと共に、勿論、我が國體とも、國民性とも、國民生活とも乖離するものでなく、随つて又何等排斥すべき理由もない。只、併しながら、この種の民本主義は、其れが、主權者又は政治當局者が、自發的に懷抱し自律的に積極的に活用する時に於てのみ、始めて十分に價值を發揮するものであるから、若しもこれを國民や民衆が主權者や爲政者に對して強制するやうな時には、必ずこれを排斥しなくてはならない。殊に、臣民が皇室に對して聊かにても斯くの如き

要求を提出することは斷じて我が國體と背反するものである。只國民は、爲政家を警告し指導して、健全な民本主義的思想を以て民に對する——民福を増進し、民意に従つて政治に當らしめるやうにしなければならない。但し、いふ所の民福を増進し民意に従ふといふことは、勿論第一義的の意味に於てであつて、低級な眼前の幸福の増進を目的としたり、數量的に只多數國民の意志に迎合するといふ意味では斷じてない。

五

次に、廣義の民本主義を吟味しよう。第一に、これを人道的普遍的な民本主義に就いて見るに、この思想は我が國に於いて皆無であつたとはいへないが、甚だしく低級幼稚な状態にあつたことは事實である、蓋し、これは其の中心要素たる人格思想が發達しなかつたためであることは改めていふまでもない。併しながら、この思想は、我が國民生活を深め高める上に極めて必要な思想である。封建時代に於ては兎に角、今日の如き人間相互の交渉が甚だしく人格的になり、自我觀念乃至權利觀念の著しく發達した時に於ては、長者強者が、この思想を以て幼者弱者に對することは極めて必要

なことである。随つて、吾々はこの思想を、單に外來思想であるといふ理由だけで排斥するやうなことがあつてはならない。

第二に、個人的特殊的な民本主義に就いて見るに、これまた我が國本來の國民思想ではないが、而かも、前者と同様に、人格觀念を基礎とするといふ意味に於て、我が國人の歓迎し重要視すべきものである。併しながらこの意味の民本主義は、只既に一言したやうに、偏に權利を主張するのと、偏に個人主義的であるのとのために、ともすれば反抗的になり、排他的になり、且餘りに理に落ちるといふ弊害を伴ふ點に於てこれを採用する際には相當の戒心を要することを忘れてはならない。但し、この思想は上に述べたやうな弱點を包含するものであるが、在來甚だしく權利思想乃至自己尊重の念を缺く我が國民にとつては、洵に必要な思想である。されば、吾々は上記の缺點に陥らないやうに戒心した上で、十分この思想の眞實を攝取し採用しなくてはならぬ。

六

これまで略述した私の民本主義觀にして、幸ひに誤謬がないならば、私は極めて過激なものでない限り、民本主義乃至民本主義的思想は、幾分の警戒を加へさへすれば、國民生活改造の一要素として採用することが出来ると思ふものである。即ち、私は、善い意味の民本主義的要素を有効に加味することは、我が國民生活の缺陷を匡救し、我が國家文明の健全な發達を促す所以であると信ずるものである。随つて、民本主義乃至民本主義的思想の價値は各種の方面から檢覈することが出来ると共に、また各種の方面から活用することが出来るのである。併しながら、就中重大なものは、政治と國民道德と國民教育との三方面である。但し、政治上の民本主義を論ずる人には他に其の人がある。教育上の民本主義に就いては嘗て卓見を開陳したことがあるから茲には唯國民道德から其の價値を論ずることとしよう。

本論の劈頭に一言したやうに、我が國は、今や各種の方面に於て徹底的な革新を企つべき時である。併しながら、其の中心點となるものは國民道德の革新である。蓋し、前にも一言したやうに、道德は生活の中心根柢であると同様に國民生活の中心根柢で

あると共に、更に我が國民道德其のものが革新を要する状態にあるからである。

然らば、如何にすれば我が國民道德の改造が出来るであらうか。勿論、其れには種々雑多の方法があるが、其の主眼點を略言すれば、第一に、世界の現状及び近き將來の状態を明らかにし、第二に、我が國家の使命と理想乃至我が現代國民の最深要求とを明らかにし、第三に、第二項を標準として在來の國民道德の長短及び其の原因を明らかにし、第四に、現代及び近き將來の國民の精神に適應するやうに其の短所を匡救し其の長所を助成することである。然るに、國民道德の根本要素根本動力は、いふまでもなく國民性であるから、國民道德の改造はやがて國民性の改造であり、随つて主として其の任務に當るものは、廣義の國民教育者でなくてはならない。但し、本論の主眼とする所は、我が國民道德の改造に關して徹底的に論述しようとするものではないから、單に、國民道德の短所を明らかにし、且これを匡救する上に民本主義的思想と如何なる關係を有するかを明らかにすることに止めて置く。

七

我が國民道德の真相は勿論、其の長短を詳述する暇さへない。只必要上其の短所と思はれるものだけを抽象的に列擧して見れば、第一に非合理的であるといふこと、第二に非人格的であるといふこと、第三に非社會的であるといふこと、第四に餘りに精神的形式的であるといふことが、即ちそれである。そして、これらの短所は、他面から見ればやがて我が國民道德の長所であることは改めていふまでもない。然らば、これらの短所を匡救する上に、民本主義的思想は果して何等かの役に立つであらうか。

勿論、既に一言したやうに、極端な意味の民本主義的思想は、我が國民道德の短所を匡救するどころか、寧ろ倒まに其の長所を破壊するものであるが、穩健な意味に於ける民本主義的思想は、たしかに上記の短所を匡救する上に大なる効果がある。少くとも、上記の四點中、第二點及び第三點に對してはたしかに有効である。

由來、我が國民道德の長所は、其れが感情道德たるところにある。美くしい心情を以て他に對することを第一義とするところに我が國民道德の特色がある。而かも、いふ所の「心情」は、積極的のものでなくて寧ろ消極的のものである。即ち、自己を肯

定し主張するのではなくて、寧ろ自己を否定し、自己を他の犠牲にすることを本旨とするものである。これ、我が國民には、沒我的思想は著しく發達したけれども、主我的思想——自我觀念人格觀念は容易に發達しなかつた所以に他ならない。そして、この點から見る時には、我が國民道德の基調が長者本位、强者本位、義務本位、即ち悪い意味の貴族主義的となつたのは極めて當然のことである。

併しながら、凡そ人格の價値と權威とに對する自覺と畏敬感とが道德の根柢である限り、如何なる道德も反人格的であつてはならないし、随つて、我が國民道德も、普遍的の價値ある道德たらんがためには、在來の弱點を打破してどこまでも人格觀念を以て其の根柢とするやうにしなければならない。そして、若しも、民本主義が、畢竟するに人格主義であるといふ私の上記の見解が幸にも正しかつたならば、民本主義乃至民本主義的思想がこの限りに於て我が國民道德の缺陷を匡救する上に必要であり有効であることは、改めていふまでもあるまい。

然らば、人格主義としての民本主義乃至民本主義的思想を加味したならば、我が國民道德は如何様な變化を受けるであらうか。一言にすれば、在來に比して、より多く幼者弱者を尊敬し、責任を本位とし愛を本位にするやうになるのである。換言すれば、親や、主人や、男子や、富者や、上級者や、優强者等が、子女や、奴婢や、婦人や、貧者や、下級者や、劣弱者等の「人格」を尊重し、敬愛し、其の幸福をはかるやうになり、人道的要素が多分に加味されることとなるのである。更に、これを他面より見れば、廣義の民衆又は强者に屬する人達は、自己の人格を尊重するが故に自ら或る意味の個人主義的要素も加味され、斯くして、團體主義と個體主義とが程よく調和することとなるのである。

この意味に於て、民本主義的思想から最も強烈な影響を受けるものは、家庭道德乃至家族生活である。蓋し、この思想が勢力を獲れば、在來の家長權といふものが、著しく縮小されると共に、親權、主權及び夫權といふものも亦甚だしく減殺されることがあるからである。即ち、家長は、家族を己れの奴隸や己れ以下の價値のものとすることなく、人格としては何れも己れと同等の價値を持つた成員と見、随つて、其の權

利自由を認め、且出来るだけ合理的に、自覺的に、家庭生活を営むこととなるのである。否、ひとり家長と家族との関係のみならず、親と子との関係、夫と妻との関係、主人と召使との関係も、在來とは面目を一變して、上に述べたやうな意味の人格的即ち本當の倫理的関係となるのである。斯くして、將來の家庭道德に於ては、在來の如く、孝道、婦道乃至從者道のみ偏重されることなく、これと共に、更に、私の所謂親道、夫道及び主道が著しく尊重され、頓に發達することとなるのである。更に親權が縮少される結果として、在來の如き総合的な家族制度の形式は次第に廢れ、我が國本來の家族制度の精神を失はない範圍に於て夫婦本位の家庭制度となり、そして件の夫婦關係も亦、既に一言したやうに在來の如き主從關係の如き不自然なものではなくて戀愛——愛中心乃至人格的のものとなり、斯くして最も自然にして最も健全な家庭生活を形造ることとなるに至るのである。

翻つて、社會生活に就いて見るに、この方面に於て最も激烈な變化を受けるものは、廣義の上長者と下級者との關係である。即ち、傭人と被傭人、官吏と民衆、教師と生徒、富者と貧者の關係が著しく人格的となり、合理的となり、斯くして健全な社會組織、即ち、所謂近代社會生活を形造ることとなるのである。

最後に、我が國民道德は、よい意味の民本主義的思想を加味することによつて、非社會的といふ一大缺點を匡救することが出来るのである。蓋し、既に述べた如く、よい意味の民本主義的思想には社會的要素が包含されてゐるからである。換言すれば、民本主義的思想には、反個人主義的要素が包含されてゐるし、随つて、これを有効に加味する時には、我が國民道德は、在來の如く、偏に其の個人的、私的一面のみに止ることを免れて、其の社會的方面、即ち政治的、實業的、職業的方面をも十分に發達せしめることが出来るやうになるからである。就中、最も大きな變化を見るのは、其の政治的方面である。實に、我が國民道德は、只よい意味の民本主義的要素を加味することによつてのみ、眞に優秀な政治道德——立憲國民・法治國民・公民として必要な道德の發達を見ることが出来るのである。

八

以上、私は、外來思想が我が國民生活に如何なる關係を有するか、又如何なる態度を以て外來思想に對したならば、我が國民生活の改造の上に資益することが出来るかといふことを民本主義的思想と國民道德との關係を中心として略述した。勿論、既に一言したやうに、この問題を徹底的に闡明するには、以上の外尙幾多の點に關して詳論することを要するが、茲には其の餘白を持たないから、單に其の主眼點を明らかにしただけに止めて置くこととする。

國民思想の統一と振作

一

最近の我が思想界に於ける一個の顯著な現象は、「國民思想」といふことが一部識者の注意を喚起しつゝあるといふことである。そして、これは洵に當然なことであり、随つてまた甚だ欣ぶべきことである。蓋し思想は、個人に於ても國家に於ても、生活の一中心要素であり、随つて、生活の革新改善に際しては、第一着に革新し改善さるべきものであるのみならず、更に、今日の我が國は、所謂「戦後經營」といふ國民生活の大革新期に面接してゐながら、而かも其の原動力となり根柢となるべき思想界乃至思想生活が、甚だ好ましからざる状態にあるからである。

然るに、「國民思想」といふものに對して注意する人達の態度を見るに、其の現状に對して不満と憂慮とを感じ、随つて一刻も速やかにそして少しでも完全にこれを改善しなくはならないと考へる點に於ては何れも其の揆を一にするにも係らず、其の改善

法の主眼點に於て、自ら二種の差異があることを、吾々は見逃すことが出来ない。即ち、一つは國民思想の「統一」を主眼とするのであり、他の一つは國民思想の「振作」を主眼とするものである。そして、前者は主として政府當路者が取らうとする所の手段であり、後者は主として宗教家——一部の佛教家が取らうとする所の手段である。然らば、斯くの如き國民思想の改善策は果して適當なものであらうか。希くは、私をして思ふ所を語らしめよ。

二

凡そ如何なる改善策も、其れが眞に價值あるものとなるためには、少くとも二つの豫備的條件を具へてゐなくてはならない。改善しようとする對象の真相——殊に其の缺陷に對する正しい理會と、妥當なそして高大な理想とが即ちこれである。何となれば、抑も改善策を要するのは、對象に必ず何等かの缺陷があるためであり、随つてこれを正確に理會してゐなければ、改善しようとする要求が起つて來ないし、たとひ對象の缺陷を正確に理會してゐたにしても、絶えずよりよいものを要望する理想的精神

が動いてゐなければ、件の缺陷を改善しようとする眞の熱心が起つて來ないし、更にまた、理想が眞に妥當なそして高大なものでなければ、改善しようとする要求も熱心も單に形式的なものに止るか、さうでなければ極めて僅少な程度の改善を見るに止るからである。就中、改善策の客觀的價值を決定する主要素は、前者——對象の真相乃至缺陷を正しく理會することである。随つて、私も、本論の主題たる國民思想の改善に關する二つの方策を批評するには、何よりも先にこの點を主眼として見なくてはならない。

然らば、第一に、國民思想の「統一」を以て改善の中心點とするものは、我が國民思想の現状乃至缺陷を何と見るであらうか。いふまでもなく「統一」は「混亂」の反對であるから、「統一」を要望する彼等が、國民思想の現状乃至缺陷を以て混亂にありとすることは多言を須つぎでなく極めて明白なことである。然らば、第二に、國民思想の「振作」を以て改善の中心點とするものはどうであらうか。いふまでもなく、「振作」は「萎微」を豫想するものであるから、「振作」を要望する彼等が、國民思想の現

狀乃至缺陷を以て「萎微」にあるとすることは、前者と同様に、詳述を要しない明白事である。

吁、國民思想の混亂と萎微！ 果して真に然るか。

三

繰返して問ふ。現今の我が國民思想は、果して真に混亂萎微の状態にあるであらうか。遺憾ながら、私は少くとも一度は「然り」と答へなくてはならない。

先づ前者について見るに、我が現今の國民思想はたしかに混亂してゐる。舊思想と新思想、及び本來の國民思想と外來思想との間に、健全な調和も統一もなく、舊きは永しへに舊くして偏に新らしきを排し、新らしきは益々新らしくて偏に舊きを斥け、本來のものは外來のものを單に外來のものであるが爲に没批判的に有害無益と見、外來のものは本來のものを一圖に偏狹固陋として蔑視し、斯くして、新舊内外の思想が只雜然として相混在し、騒然として相鬭争しゐるのが、やがて我が思想界の現状ではないか。勿論、「複雑」は必ずしも「混亂」ではないから、私は我が思想界に新舊内外

各種の思想が混在してゐることを以て、直ちに「混亂」してゐるとするものではない。併しながら、件の混在の仕方が文字通の「混在」であつて、諸多の思想の間に眞に明確な標的も中心も主潮もないといふ意味に於て、換言すれば、「統一」を缺くといふ意味に於て、我が思想界の現状は遺憾ながら「混亂」の名を以て呼ばなくてはならないのである。

次に、後者について見るに、我が現今の國民思想はたしかに萎微してゐる。換言すれば、活氣に乏しく緊張を缺いてゐる。勿論これを一見すれば、我が現今の思想界は如何にも活氣に富み緊張に充ちてゐるかのやうにも思はれる。蓋し、我が現今の思想界には各種の思想問題が數多く存在して、何れも解決を求めつゝあるからである。併しながら、更に一步を進めて、詳細に吟味するに、いふ所の活氣や緊張は、眞の活氣や緊張ではなくて、寧ろ上に述べたやうに、單なる「混亂」の外觀に過ぎないのである。何となれば、凡そ思想界が眞に活氣を帯び眞に緊張を呈することは、只高大な理想を有し、且この理想によつて現状を改善し、混亂を統一して行かうとする時に於て

のみ可能であるに、我が現今の思想界は、既に述べたやうに件の理想を缺くがためである。換言すれば、問題が澤山あるにも係らず、其れらは何れも只磊々と孤立し、雜然と混在して不徹底な妥協を試みてゐるか、但しは、沒批判的な排撃を事としてゐるのが、やがて我が思想界の現状だからである。

斯くの如く見る時には、我が現今の思想界は混亂萎微の状態にあるといふことは、遺憾ながら蔽ふべからざる事實である。そして又、いふ所の「混亂」と「萎微」とは沒交渉な二つの現象ではなくて、實は其の根源を等しうする同一現象の両面であるといふことも亦明らかである。然らば、我が現今の思想界をして斯くの如き憂ふべき状態に到らしめた根源は何であるか。一言すれば、我が國民が眞に徹底した「自覺」を持たないことこそは、やがて我が思想界の現状をして、斯くの如き憂ふべき状態を呈するに至らしめた根源である。但し、いふ所の「自覺」とは、通例使用される單なる知的意味のものではなくて更に情意的要素をも含めたもの、即ち、「現實を反省し認識すると共に、理想を樹立し且其の實現を期する」といふ意味のものであることは

いふまでもない。實に、我が現今の思想界は、この意味の自覺を缺くためにこそ、やがて一面に於ては、「統一」を缺くと共に、他面に於ては、「活氣」と「緊張」とを缺くに至るのである。蓋し、この意味の自覺こそは、とりもなほさず統一の原動力であり活氣と緊張の原動力だからである。換言すれば、この意味の自覺がある時には、個人に於ても國民に於ても、單に自己の現状を理會するだけに止らず、更に進んでこの現状を改善しようとする要求が目覺め、且この要求に十分な満足と與へる理想と理想實現の方途とを生み出し、随つて、無意義な暗中摸索と無用な抗爭排撃の境地とを脱し、光明と希望とを以て、統一的に斷えざる前途を持続することが出来るからである。

若しも、斯くの如く、我が思想界の現状を「混亂」と「萎微」とに依つて形容する彼等の見解が不幸にして妥當であるとするならば、次に、彼等の改善策其のものは果して同様に妥當であらうか。換言すれば、主として政府當路者の企てつゝある國民思想の「統一策」と、主として一部佛教家の試みつゝある「振作案」とは果して眞に適切なるものであり、眞に有効なるものであらうか。

四

先づ、第一の方案から檢するに、所謂「國民思想の統一」をはからうとするものは、果して如何なる方法を以てこの目的を達しようとするであらうか。

改めていふまでもなく、統一には、其の性質上本來二つの種類がある。一つは、靜的統一・外的統一乃至機械的統一であり、一つは、動的統一・內的統一乃至有機的統一である。前者は、統一の原動力が統一體以外にあるもので、統一體内の要素又は部分の間には內的關係がなく、随つて統一されることによつて何等質的變化がないと共に統一力が離れる時には倏ち分離するものである。後者は、統一力が統一體以内、詳しくは統一體内の要素又は部分其のものゝ中にあるもので、各要素又は部分は勿論離るべからざる內的關係を有し、随つて統一されることによつて質的變化を生ずるばかりでなく各々統一體の全體性を表明し、随つて要素又は部分を離れて統一體がないと共に、統一してゐること及び統一の目的を外にして統一力がなく、自ら統一してゐることとは、やがて價值體となつてゐること、即ち或る目的を追求して斷えずよりよくなり

つつあることを意味するものである。そして、後者こそは眞の統一である。

然るに、現今の我が國に於て國民思想の統一をはかるものゝ態度を見るに、其の多くは、第一の意味に於ける統一を目的とするものゝやうである。これを具體的にいへば、彼等の多くは、國民思想を統一するに、大凡二つの方法を用ゐてゐる。一つは、種々難多な本來の思想又は既存の思想を特に或る代表的思想によつて、外的に壓迫的に——有害無用と見えるものを壓迫して——統一しようとするものであり、一つは、在來の國民思想以外の思想即ち外來思想を排斥することによつて、消極的に統一しようとするものである。勿論この兩法は全然別なものではなくて、實は一つの方法の兩面である。即ち、前者はこれを縦から見なものであり、後者はこれを横から見なものであつて、畢竟するに諸多の思想を或る一定の外的標準に照して機械的外的に統一しようとする點に於ては同様である。然らば斯くの如き方法は、果して眞に國民思想の統一を期することが出来るであらうか。

これを表面から見れば、この方法にはたしかに相當の價值がある。蓋し、混亂を極

めた思想を統一するには、或る一定の標準を立て、且これに照して有害無益と見ゆるものは、本来の思想と外來の思想とを問はず一切壓迫し排撃することは、少くとも最も便利な統一法だからである。

併しながら、便利は必ずしも直ちに完全ではない。少くとも、國民思想統一の問題に於ては、其の主眼點となるものは便不便といふことではなくて、寧ろ、完否といふことである。そして、國民思想の統一をして完全なものたらしめるには、思想其のものゝ性質と、我が國民思想の現状と、其の統一の目的とに恰適させなくてはならない。然るに、第一に、思想は個人思想に於ても國民思想に於ても、本来統一的のものであると共に、自由と進歩とを生命とするものであり、随つて、眞の統一は、只内面からのみ出来るものである。第二に、我が國民思想界は、外形を整へる前に、其の内容の充實と進展と——複雑にすると共に深遠にする——を要するやうな状態にあるから、本来の思想に對しては勿論、外來思想に對しても、みだりに壓迫や排斥を試みるべきものではなくて、寧ろ、少しでも價值あるものは、これを助長し歓迎すべきである。

第三に、我が國民思想の統一を必要とするのは、單に其の外形を整へることによつて少康を得るがためではなくて、寧ろ、それを健全に發達させるためであり、随つて、みだりに消極的態度を取るべきものではない。そして、斯くの如き見地から見るとは、現今見る如き統一論者の統一策が、便利ではあるが完全なものでないことは、多言を俟つまでもなく極めて明白なことである。實に、今日の我が國に於て最も必要にして有効な統一策は、この種の靜的、外的、機械的なものではなくて、寧ろ、上に述べたやうな動的、內的、有機的統一によるものでなくてはならない。

然り、我が國に於て今日眞に必要な統一は、思想其のものゝ醜醜の結果として自ら生じたものである。壓迫と排斥とに依つて、消極的に、不自然に、そして辛うじて生じた統一——似而非統一は、一時の小康を生むではあらうが、決して國民思想其もの及び國民生活の健全な發達の原動力とはなり得ない。この意味に於て、私は我が思想界の混亂を意とするよりも、寧ろ上に述べたやうな似而非統一を恐れるものである。蓋し、既に一言したやうに、思想は、本来「自由」を生命とするものであり、隨

つて外からは十分に統一——壓迫や排斥することが出来るものではないし、若し強ひてこれを試みる時には必ず強烈な反動と爆發とを見るものだからである。されば、眞に國民思想の健全な統一をはからうとするものは、決して、近眼視的思想に囚はれて、偏狹固陋の態度を取るやうなことがなく、其の理想を高くし、其の眼界を廣くして、たとひ目前には幾分の弊害ある思想と雖も、將來に於て有益なものは新舊と内外との別に論なく、十分發達の自由を與へるやうにしないでなければならない。殊に、今や戰爭の結末期に近づいた結果として、諸種の思想が旺に興起する時であるから、政府當路者は特に注意して、目前の小利のために將來の大害の種を蒔くやうなことがないやうにしないでなければならない。

但し、斯くいへばとて、私は決して一切の思想に自由を與へよと要望するものではない。思想にも價値の高下があり、外來のものは勿論、本來のものにも亦有害なものが決して少くないから、其れらに對して嚴密な選擇を施すことは、警世家の責任であることはいふまでもない。殊に、思想界が甚だしく混亂を極めてゐるばかりか、本來

外來思想に對しては甚だしく沒批判的であり勝ちな、そしてまた、國民思想も國民生活も極めて獨自性に富んだ我が國に於ては、外來思想に對して周匝な注意を拂ふことは最も必要なことである。要は保守的態度と沒批判的態度とを取ることによつて、玉石藥毒を併せ排したり小害のために大利を捨てたりする結果、角を矯めんとして牛を殺すが如き愚に陥り、却つて、國民思想の萎微を來すが如き結果とならないやうに警告するに過ぎない。換言すれば、私は畢竟、謂ふ所の「國民思想の統一」をして眞の統一——進歩の原動力としての統一たらしめたいと要望するに過ぎない。

五

翻つて、これを「國民思想の振作」をはかるものに就いて見ればどうであらうか。私は、何よりも先づこの問題が一部佛教徒から提出されたことに深い興味を感じるものである。蓋し、私には、我が國現今の佛教徒其のものの思想こそは、何人の思想よりも先に振作さるべきもののやうに思はれるからである。但し、本論の趣旨は、佛教徒乃至佛教界の現状を批評しようといふことにあるのではないから、この點に就いては

詳述しないが、兎に角、其の思想が最も萎微してゐると思はれる佛教徒が、我が國民思想の振作の必要を絶叫し且これに着手しようとする事は、兎に角皮肉に富んだ現象であるといはなくてはならない。

然らば、彼等は如何にして謂ふ所の「國民思想の振作」をはからうとするであらうか。この點に關する詳細な方案は未だ公にされてゐないから知ることが得ないが、新聞紙の傳へるところによれば、彼等は主として「布教」の方法に依るとのことである。そして私は、この方法に對しては何等の異議もなく、謹んで彼等の勞を多とするものである。只私の問題とするところは、彼等は抑も「如何なる思想」を「如何なる態度」で「何人」に傳へようとするかといふことである。蓋し、私は、在來佛教徒の「思想」と「態度」と其の對象とに對して少からざる不満と疑惑とを感じてゐるからである。

既に反覆したやうに、我が現今の思想界が萎微してゐるのは、畢竟するに國民に眞の「自覺」がないためである。随つて、國民思想の「振作」をはからうとするならば、何よりも先に、國民をして眞の自覺を持たしめることに努めなくてはならない。そし

て國民をして眞の自覺を持たしめるには、彼等の改造の意志——理想的精神を觸發することを出發點としなくてはならない。而かも、いふ所の理想的精神は、抽象的な、形式的な、空靈虛昧なものではなくて、生ける現實生活の改造を目的とする所の眞に力強いものでなくてはならない。

然るに、在來乃至現在の佛教徒の状態を見るに、私の要求するやうな理想的精神の旺盛なものは洵に尠い。これは、佛教徒其のものの本性から由來する當然の結果とも見ることが出来ないではないが、畢竟するに、佛教徒の「宗教家」及び「人」としての覺悟と修養の上に缺けるところがあるためではないか。勿論、私は佛教思想を全然排斥しようとするものではないが、極めて複雑なそして進歩した文化を有し、且其の思想の基調に於て著しく反佛敎的な現代に於て、其れによつて人を教化するには勿論、一身を修める上にすらも、佛教思想は、少からざる革新と戒心とを要するものである。況んや、「國民思想の振作」といふが如き大事業を達成するがためには、尙更である。